

角部内南台東貝塚

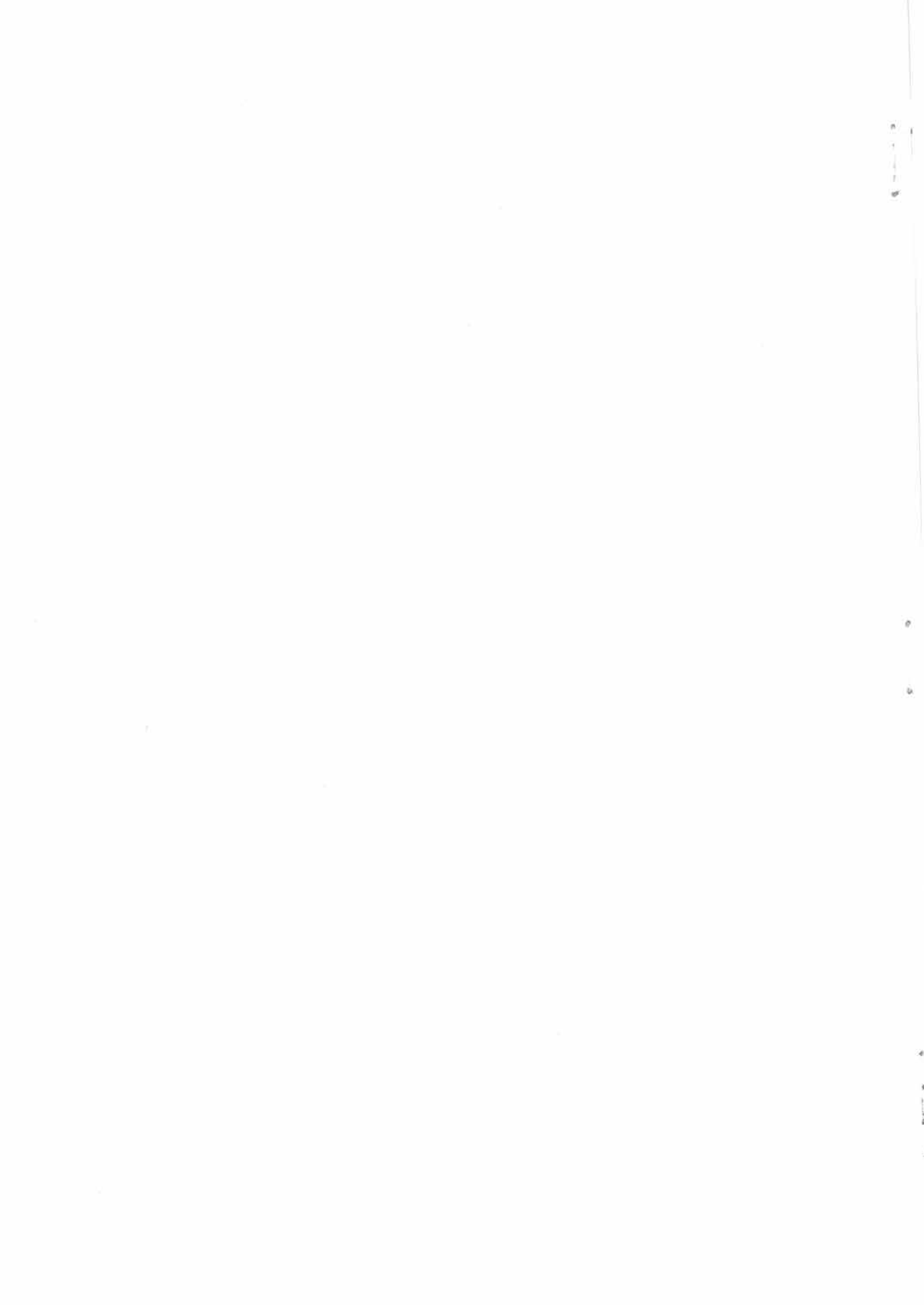
1988年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会

角部内南台東貝塚

玉川一郎

吉田秀享



序 文

相馬郡小高町は国指定史跡の薬師堂石仏などをはじめとして、歴史的にも重要な遺跡を数多く抱えております。特に縄文時代の遺跡としては貝塚遺跡が多数残る町ということができましょう。上浦地区に所在する宮田貝塚は町史編纂にあたって学術的な調査が実施され、出土した縄文土器は宮田第Ⅲ群土器として図録などにも紹介されるなど、我が町の貝塚文化を代表する遺跡の1つでもあります。

しかしながら数多くの貝塚も、学術的に調査された件数が少いためか、その歴史的な重要性は一部の研究者にしか知られておらず、残念といわざるを得ないのであります。

角部内南台貝塚は地元の研究者には早くから知られていた貝塚ではありますが、学術的に調査されたことはありませんでした。ところが昭和61年夏、貝塚のある台地東側斜面の崩落防止のための工事を計画しましたところ、法面に貝層の一部が露呈し、当時福島県文化財保護指導員であった玉川一郎氏の目に触れることとなり、関係機関と協議した結果、今回の発掘調査となったのであります。

調査の結果、貝層そのものは小規模な縄文中期のブロック貝層であることが判明しましたが、表土層の中に混在していた縄文前期前半の土器片は、類例の少い貴重なものであることがわかりました。

今回この調査の成果がまとまりましたので報告書として刊行いたしますが、本書が文化財の保護、また考古学研究の資料として活用いただけますよう切望して止みません。

最後に、この調査にご協力・ご指導をいただきました関係者各位に深く感謝申し上げます、序文といたします。

昭和63年3月

小高町教育委員会

教育長 齋 藤 勝

例 言

- 1 本書は、昭和61年度に実施した福島県相馬郡小高町角部内字南台に所在する角部内南台東貝塚の緊急発掘調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、「県単治山施策補助事業角部内地区」に係る事前調査として、小高町教育委員会が主体となり、発掘調査担当者を玉川一郎にあて調査を実施した。
- 3 発掘調査は、昭和61年9月13日から9月15日までの3日間であり、調査面積は10㎡である。
- 4 本書に使用した実測図は主として吉田秀享、拓影図は、上野真理、佐々木幹子、佐藤かおり、市川佐知子が行った。又、トレースは、吉田及び佐藤、沼田恵美子が行なった。
- 5 本書内の実測図中の方位は磁北を示している。
- 6 本書内の遺物実測図の中で土器拓影図は $\frac{2}{3}$ 縮小を原則としたが一部 $\frac{1}{3}$ 縮小したものもある。また石器は $\frac{1}{2}$ に縮小した。
- 7 土器拓影図の断面図に“S”の字があるのは、胎土に繊維を含むものである。
- 8 本書の執筆は、玉川と吉田が行い、最終的に玉川が編集した。いずれも文末に文責を明記しその責務を明確にした。又、自然遺物については現在資料整理中であり、その概要だけを収めた。いずれ稿を改めて公表する予定である。
- 9 本調査の発掘調査並びに報告書を執筆するにあたり、次の方々より御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
飯村 均 石本 弘 齊野 裕彦 佐藤 典邦 庄子 敦 鈴鹿 良一
鈴木 功 鈴木 雅文 寺島 文隆 長島 雄一 西村 博文 芳賀 英一
原 充広 原 薫 本間 宏 松本 茂 村田 晃一 山内 幹夫
財福島県文化センター遺跡調査課 (敬省略)
- 10 本遺跡に関する資料は、すべて小高町教育委員会で保管する予定である。

目 次

第1章 遺跡の位置と調査の経過	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査の経過	4
第2章 遺構と遺物	7
第1節 遺物包含層	7
第2節 出土遺物	7
1 土器	7
2 石器	26
3 自然遺物	26
第3章 ま と め	28
第1節 貝層と小高町の貝塚	28
第2節 出土土器について	29

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の貝塚	2	第10図 角部内南台東貝塚出土土器(6)	14
第2図 角部内南台東貝塚地形図	3	第11図 角部内南台東貝塚出土土器(7)	15
第3図 角部内南台東貝塚調査区付近地形図	5	第12図 角部内南台東貝塚出土土器(8)	17
第4図 調査区と土層断面図	6	第13図 角部内南台東貝塚出土土器(9)	19
第5図 角部内南台東貝塚出土土器(1)	7	第14図 角部内南台東貝塚出土土器(10)	20
第6図 角部内南台東貝塚出土土器(2)	10	第15図 角部内南台東貝塚出土土器(11)	21
第7図 角部内南台東貝塚出土土器(3)	11	第16図 角部内南台東貝塚出土土器(12)	22
第8図 角部内南台東貝塚出土土器(4)	12	第17図 角部内南台東貝塚出土土器(13)	23
第9図 角部内南台東貝塚出土土器(5)	13	第18図 角部内南台東貝塚出土石器	25

図版目次

- 図版第1 遺跡
角部内南台東貝塚遠景
角部内南台東貝塚調査地点
- 図版第2 遺跡
調査区貝層の状況
調査区南壁の状況
- 図版第3 遺物
縄文土器(1)
縄文土器(2)
- 図版第4 遺物
縄文土器(3)
縄文土器(4)
- 図版第5 遺物
縄文土器(5)
縄文土器(6)
- 図版第6 遺物
縄文土器(7)
縄文土器(8)
- 図版第7 遺物
縄文土器(9)
縄文土器(10)
- 図版第8 遺物
縄文土器(11)
縄文土器(12)
- 図版第9 遺物
縄文土器(13)
縄文土器(14)
- 図版第10 遺物
縄文土器(15)
縄文土器(16)
- 図版第11 遺物
縄文土器(17)
縄文土器(18)
- 図版第12 遺物
縄文土器(19)
縄文土器(20)
- 図版第13 遺物
縄文土器(21)
縄文土器(22)
- 図版第14 遺物
縄文土器(23)
縄文土器(24)
- 図版第15 遺物
縄文土器(25)
縄文土器(26)
- 図版第16 遺物
縄文土器(27)
縄文土器(28)
- 図版第17 遺物
縄文土器(29)
縄文土器(30)
- 図版第18 遺物
縄文土器(31)
縄文土器(32)
- 図版第19 遺物
縄文土器(33)
縄文土器(34)
- 図版第20 遺物
縄文土器(35)
縄文土器(36)
- 図版第21 遺物
縄文土器(37)
縄文土器(38)
- 図版第22 遺物
縄文土器(39)
石器

第1章 遺跡の位置と調査の経過

第1節 遺跡の位置と環境

角部内南台貝塚は、福島県相馬郡小高町大字角部内字南台に所在する縄文時代の貝塚である。JR小高駅からは東南東に約3kmの地点に位置している。

福島県浜通り地方は、阿武隈山地東縁の太平洋沿岸地域を包括するが、一般的にこの地域の地形は、阿武隈山地東縁の久ノ浜一岩沼構造線を境とし、東側太平洋岸までは東延する相双丘陵と、それを開析した河岸段丘・海岸段丘で構成される。

遺跡のある小高町は、東流して太平洋に注ぐ小高川と宮田川の小河川流域を中心とし、その両側の相双丘陵を行政区域としている。そしてこれらの丘陵縁辺には数段の河成・海成段丘が発達しており、両河川の河口付近には近年まで潟湖が形成されていた。小高川河口の前河浦、宮田川河口の井田川浦がそれである。こうした自然環境は縄文時代には豊富な魚介類の生棲する舞台を形成し、それ故に小高町には未だ手つかずの貝塚が多数所在するのである。即ち宮田川南岸の丘陵および段丘面に立地する北原貝塚・北原西貝塚・台の前貝塚・西向貝塚、小高川南岸の角部内南台貝塚などがそれであり、これらの貝塚は縄文前期初頭～後期にわたる比較的規模の大きな貝塚である。ほとんど学術的な調査が進展しておらず貝塚の具体的な様相は把握できないが、表面観察によればアサリ・カキなどで構成されるらしい。全国的に貝塚が消滅する中では貴重な貝塚群というべきであろう。

これら河口付近に残る貝塚の他に、小高川・宮田川流域には現汀線より4.5～5km内奥に立地する貝塚も知られる。小高川流域の片草貝塚、宮田川流域の宮田貝塚などである。片草貝塚は大木2a式期のアサリを主体とする貝塚、宮田貝塚はキサゴ・アサリを主体とする、いわゆる宮田第Ⅲ群土器に代表される縄文前期初頭の貝塚であり、両者のその在り方は縄文海進の具体相を考える上で重要である。

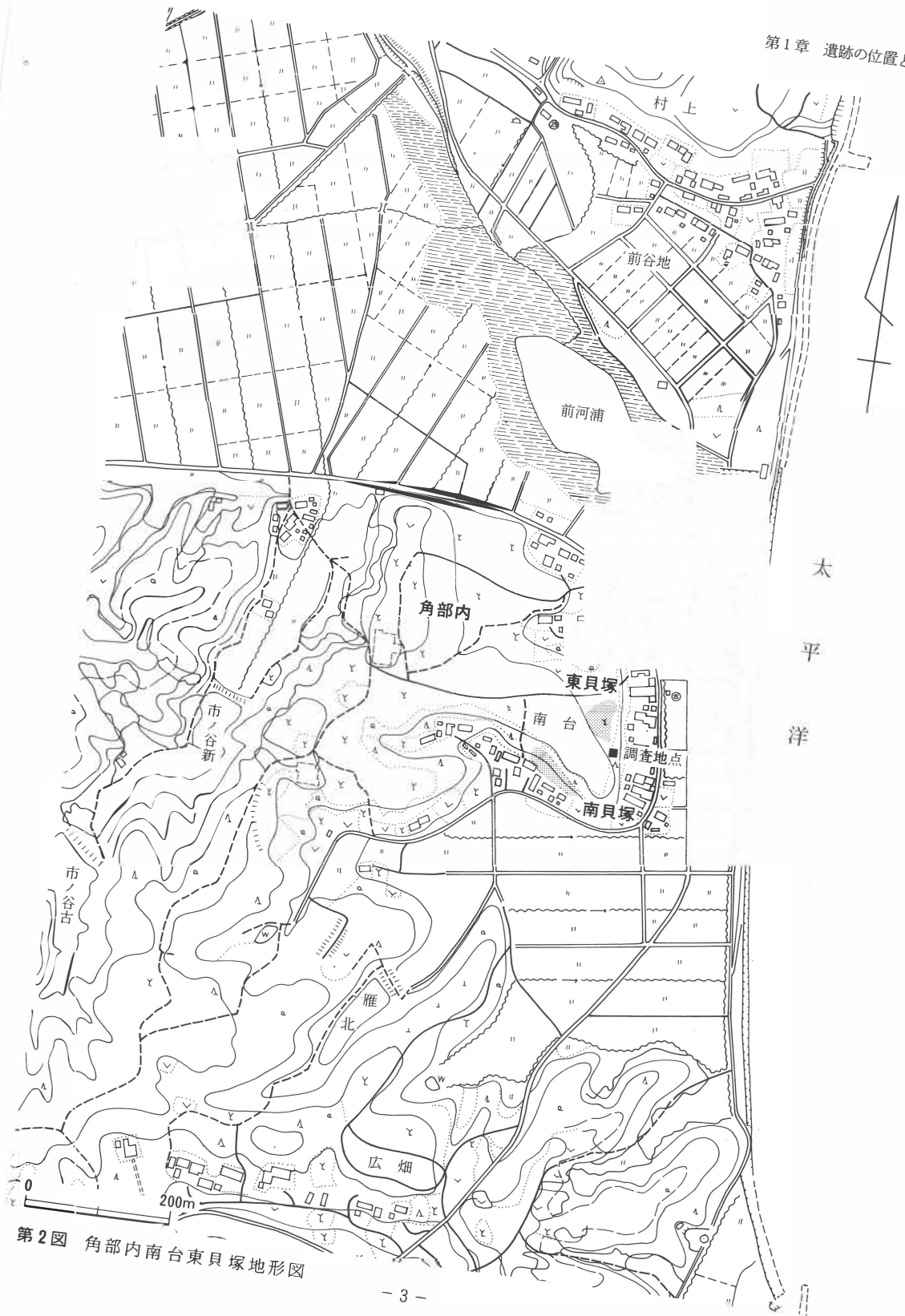
ところで今回小規模ながら発掘調査を実施した角部内南台貝塚は、小高川南岸の相双丘陵とその東に形成された、恐らくは海成と考えられる段丘(第3段丘)の東端に形成された貝塚であるが、表面観察によれば南斜面と北側の平坦地の2ヶ所に貝層の散布が認められる。いずれもアサリを主体としており、遺跡台帳では縄文後期の貝塚としているが、前期・中期の土器片も混在しており、現在では貝層の形成時期を限定できない状況にある。いずれにしても中間の平場を集落とした一連の貝塚であることは間違いない。貝塚の東・南の段丘崖は急崖を呈して標高1～2mの水田面に移行している。段丘崖東端からは東へ約200m付近に現汀線が位置している。(玉川)

第1節 遺跡の位置と環境



- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 角部内南台東貝塚(縄文前・中期) | 6. 北原西貝塚(縄文前期) |
| 2. 角部内南台南貝塚(縄文前・中期?) | 7. 北原貝塚(縄文前・中期) |
| 3. 小谷津貝塚(縄文) | 8. 加賀後貝塚(縄文) |
| 4. 浦尻西向貝塚(縄文前・中・後期) | 9. 宮田貝塚(縄文前期) |
| 5. 浦尻台ノ前貝塚(縄文前・中・後期) | 10. 片草貝塚(縄文前期) |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 角部内南台東貝塚地形図

第2節 調査の経過

角部内南台貝塚の立地する段丘崖は、前述したように急崖を呈していて、崩落の危険度の高い地域である。そのため小高町では、この地域について「県単治山施策補助事業角部内地区」として崩落防止を中心とした治山事業を実施している。この事業は貝塚の立地する東側段丘崖を対象としていたが、この部分は貝塚の散布域からは外れているため、文化財保護法による事前協議の対象とはしないまま工事を実施して来た経緯がある。

昭和61年、小高町は61年度事業として通算3年次目の事業に着手することになった。この年8月、当時福島県文化財保護指導員として町内の重要遺跡のパトロールを行っていた玉川は、この事業により土砂の一部が削りとられた法面において、小規模な貝層が露呈している事実を確認し、早速町教育委員会に善後策を講ずるべき旨通報したのであった。

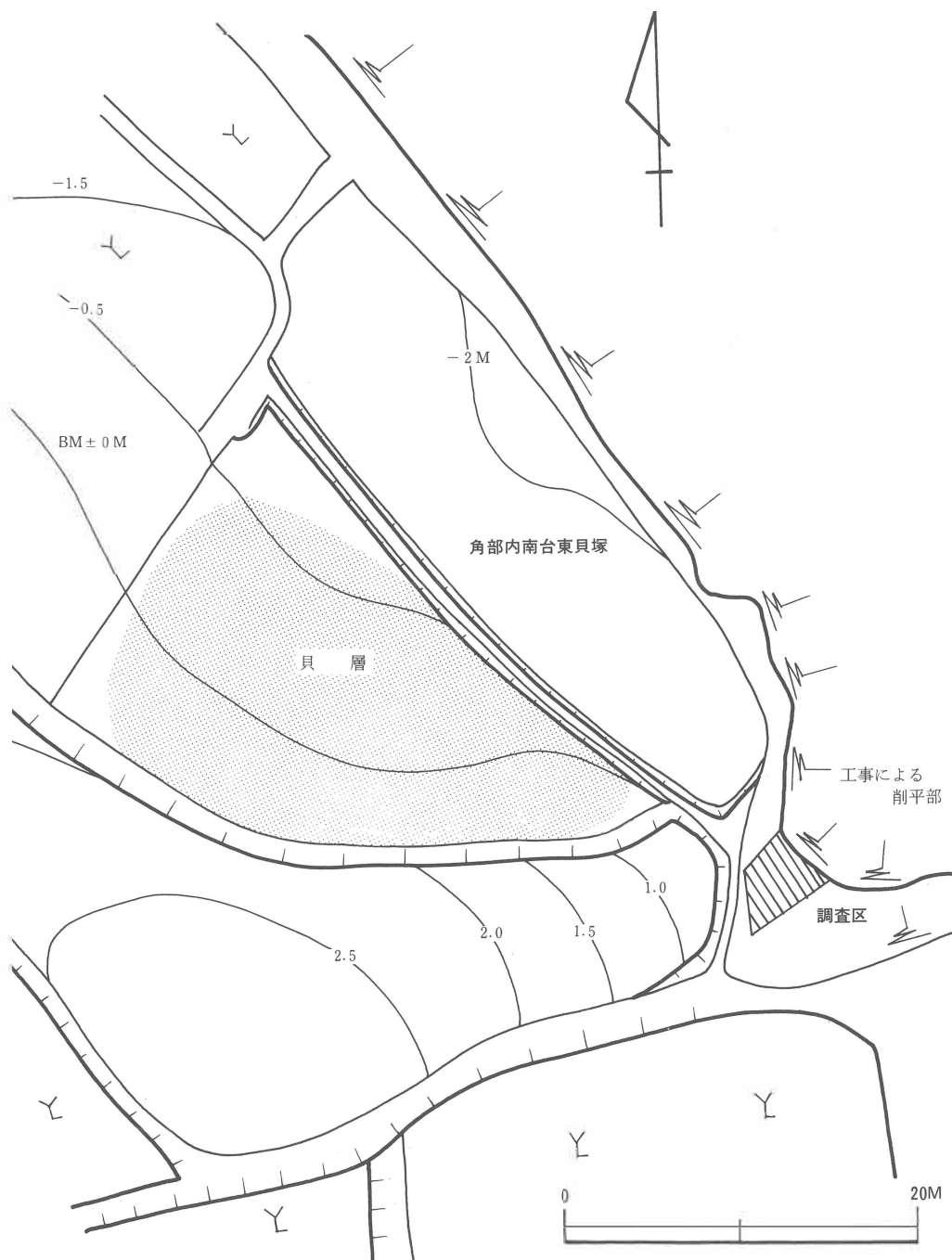
連絡をうけた町教育委員会では、現地確認を行う一方、関係機関と協議を実施したのであるが、事業の緊急度を勘案すれば工事を中止するわけにはいかず、早急に発掘調査を実施することとなった。そこで次のような体制で発掘調査を計画したのである。

遺跡の名称	角部内南台東貝塚
調査の目的	県単治山施策補助事業角部内地区に係る発掘調査
調査期間	昭和61年9月13日～同15日
調査主体	小高町教育委員会 教育長 齋藤 勝
調査担当者	玉川 一郎(福島県文化財保護指導員, 福島県立原町高等学校教諭)
調査員	吉田 秀享(財団法人福島県文化センター文化財主事)
調査協力者	新妻 慎一(福島県立原町高等学校教諭) 浜名 紘隆(福島県立相馬農業高等学校教諭)

発掘調査は工事により削られる斜面のうち、辛うじて掘削されずに残っていた約10㎡を対象とし、斜面の谷部に東西5m、南北3mの不整な調査区を設定した。調査の結果露呈していた貝層は幅1m前後・厚さ約30cmのブロック貝層であることが判明した他、遺物包含層もほぼこの調査区内で分布範囲が限定できることも明らかとなった。この地点は角部内南台貝塚の北側の貝層散布域に隣接する部分ではあるが、これらの貝層との連続した遺物包含層とは断定できなかった。

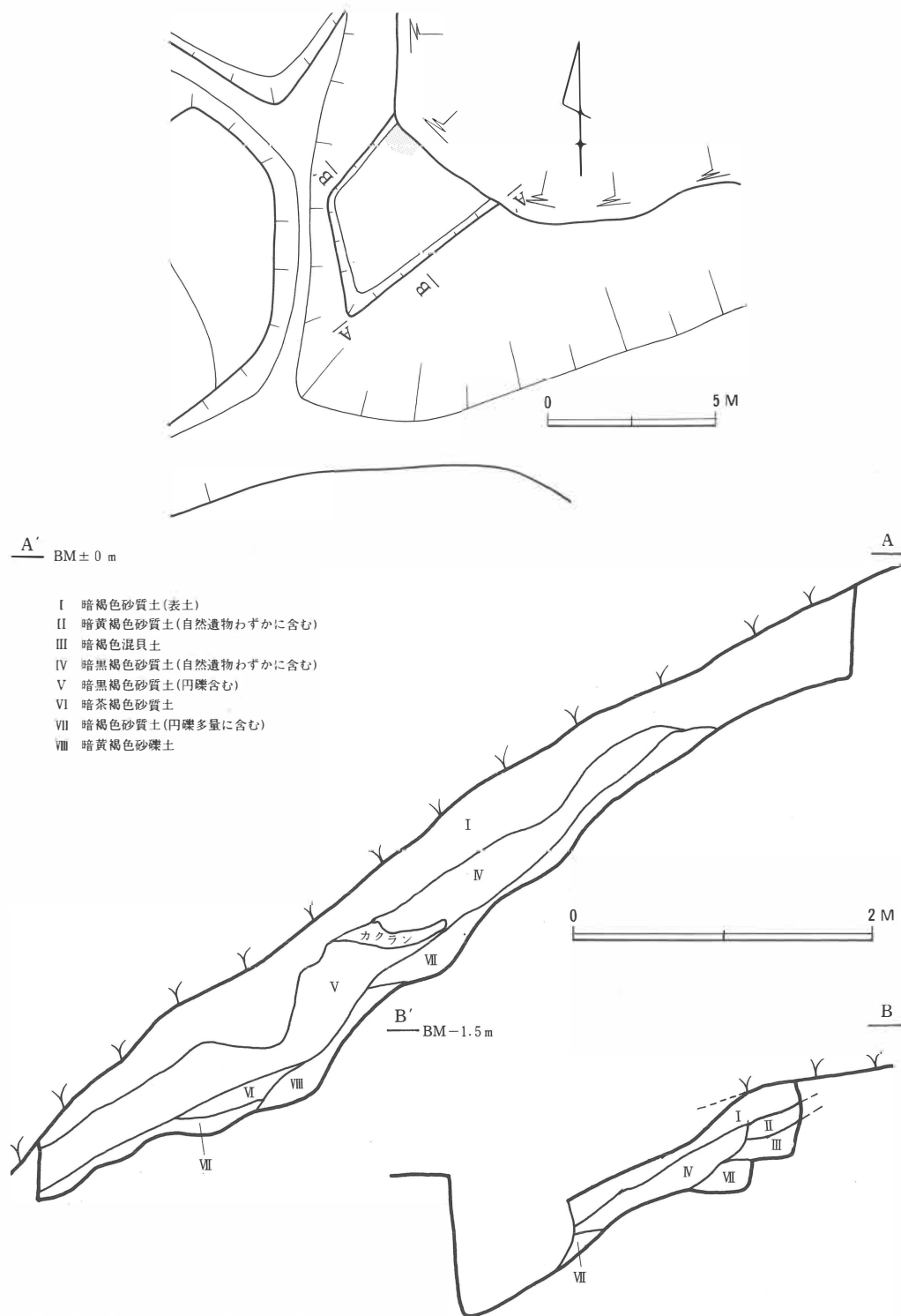
なお貝層を主とした土壌は、袋づめにして収集し、62年3月、1mmメッシュのフルイにかけ、水洗選別の上サンプリングを行ったが、この過程で得られた少量の自然遺物については現在も同定作業を継続中である。

(玉川)



第3図 角部内南台東貝塚調査区付近地形図

第2節 調査の経過



第4図 調査区と土層断面図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺物包含層

調査区は、角部内南台東貝塚の東側斜面に位置し、台地平坦部から東側に急傾斜する斜面である。層位的には7層に分けられるが、大別すると3層のユニットに分けられる。1層は、LⅡ・LⅢ層で形成される斜面凹地にブロック堆積する層である。特にLⅢ層は、貝層のブロック堆積で、径1.2m、厚さ0.3m程の狭い範囲に投棄されたものである。2層は、斜面上層に堆積するLⅣ・LⅤ層で形成される層である。斜面上層のLⅣに比してLⅤ層の方が若干黒色味を帯び、黄褐色粘性土粒(2~3cm)を包む層である。3層は、地山直上に堆積するLⅥ・Ⅶ・Ⅷ層である。沢部への二次堆積層と思われる。これらの層は、LⅢ層を除き、いずれも自然流入土で、小沢部への上方からの堆積物である。なお、LⅠ層は、表土層であるが、現代の陶磁器片なども含んでいる。大量の縄文土器が混在しているが、パサパサした盛土状の部分が多く、台地平坦面を削平した際の捨て場のような状況にあった層位と考えたい。遺物はいずれの層からも出土しており、出土する土器も様々な時期のものを含んでいる。各層が自然流入土と思われる所以でもある。

(吉田)

第2節 出土遺物

調査区内より出土した遺物は、平箱にして8箱を数える。これらは、大部分が縄文土器であり、若干の土師器・須恵器・羽口・石器を含む。また、LⅢ層を中心として出土した自然遺物(貝・獣骨)がある。本節では、角部内南台東貝塚で主体を占める縄文土器を採拓・実測し掲載した。石器は2点のみを採録した。以下、設定した項目毎に説明してゆきたい。(吉田)

1 土 器

角部内南台東貝塚の出土遺物は、前述した通り、薄い包含層からの出土である。調査区は急傾斜地であり、各層はプライマリーな状態ではなく、流入、流出の繰り返しが行なわれていたと推定される。出土土器の様相からもその観が強い。そのため、ここでは、土器自体の属性を主として分類を行う。始めに本遺跡出土土器の分類要項を挙げておく。

一角部内南台東貝塚出土土器分類要項一

第I群 縄文時代前期前葉土器群

1類 大木2a式比定 2類 大木2b式比定

第2節 出土遺物

第Ⅱ群 縄文時代前期中葉土器群

- 1類 大木3式比定 2類 大木4式比定
3類 諸磯式比定 4類 諸磯b式比定 5類 浮島式比定

第Ⅲ群 縄文時代前期後葉土器群

- 1類 大木5式比定 2類 大木6式比定

第Ⅳ群 縄文時代中期前葉土器群

- 1類 大木7a・7b式比定

第Ⅴ群 縄文時代中期中葉土器群

- 1類 大木8a式比定 2類 大木8b式比定

第Ⅵ群 縄文時代中期後葉土器群

- 1類 大木9式比定

第Ⅰ群土器—縄文時代前期前葉土器群—

本遺跡では主体を占める土器群である。その形状から2類に分かれ、更に施文文様により数種に分かれる。いずれも胎土に繊維を含む。

1類 本類は半截竹管によるコンパス文、平行沈線文のモチーフを持ち、大木2a式に比定される。a～cの3種に分かれる。

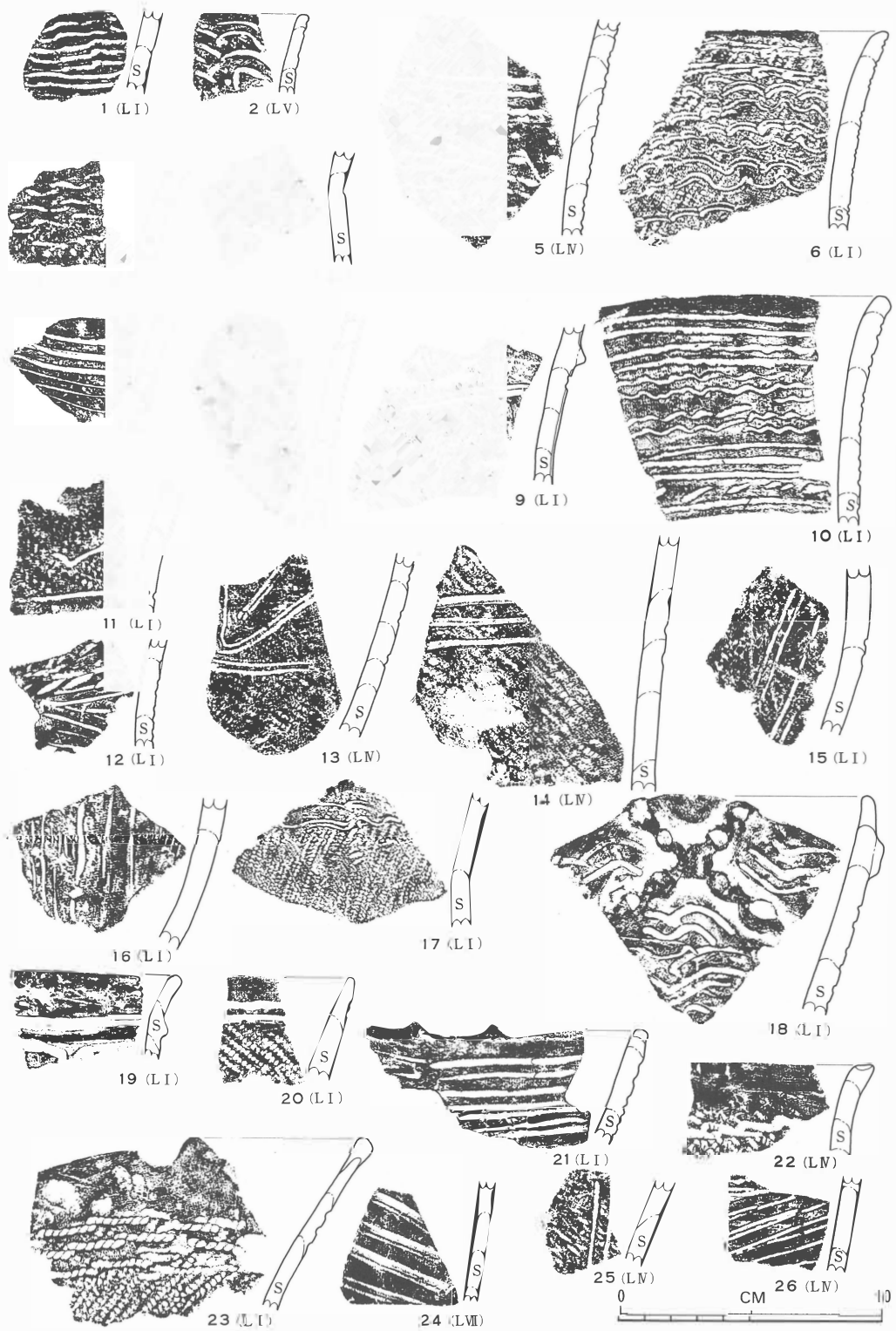
1類a種…文様モチーフにコンパス文が多用される土器(1・2・5・6・10・17)である。コンパス文(2・6)、やや波状ぎみになるもの(10・17)、不整なコンパス文(1)などがある。また、5・6は同一工具による刺突(器面に斜位に刺突したもの)文を有しており、10は竹管の押し引き刺突文をコンパス文間に横走させ、更に斜位の刺突文を持つ。

1類b種…竹管工具による平行沈線文を持つもの(4・7・21・29・32)である。器形的には若干くの字に屈曲しながら外反するもの(4・7)、波状突起を持ち外反するもの(21)、内湾するもの(29・32)などがある。また、29は口縁部に縦位の隆帯を有し、隆帯上に刺突を施している。29・32には等間隔の不整燃糸文を施す。

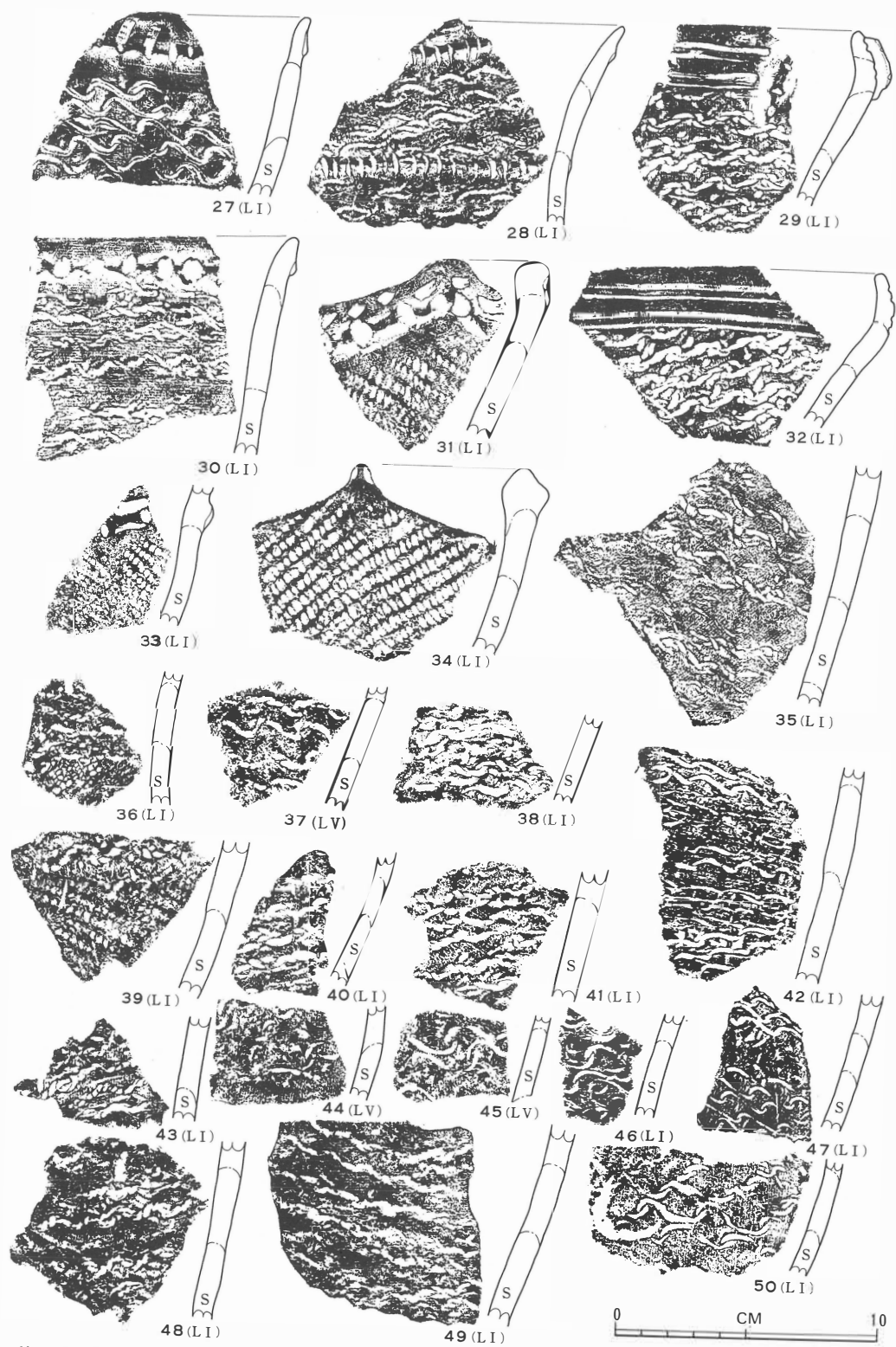
1類c種…所謂葺瓦状燃糸文を施すもの(3・23)である。いずれも下位に縄文を施し、2種類の原体を組み合わせモチーフを構成している。

2類 最も出土量の多い土器である。1類土器との区分が判然としない部分もあるが、地文・モチーフ・施文具などを主にして5種に分類した。

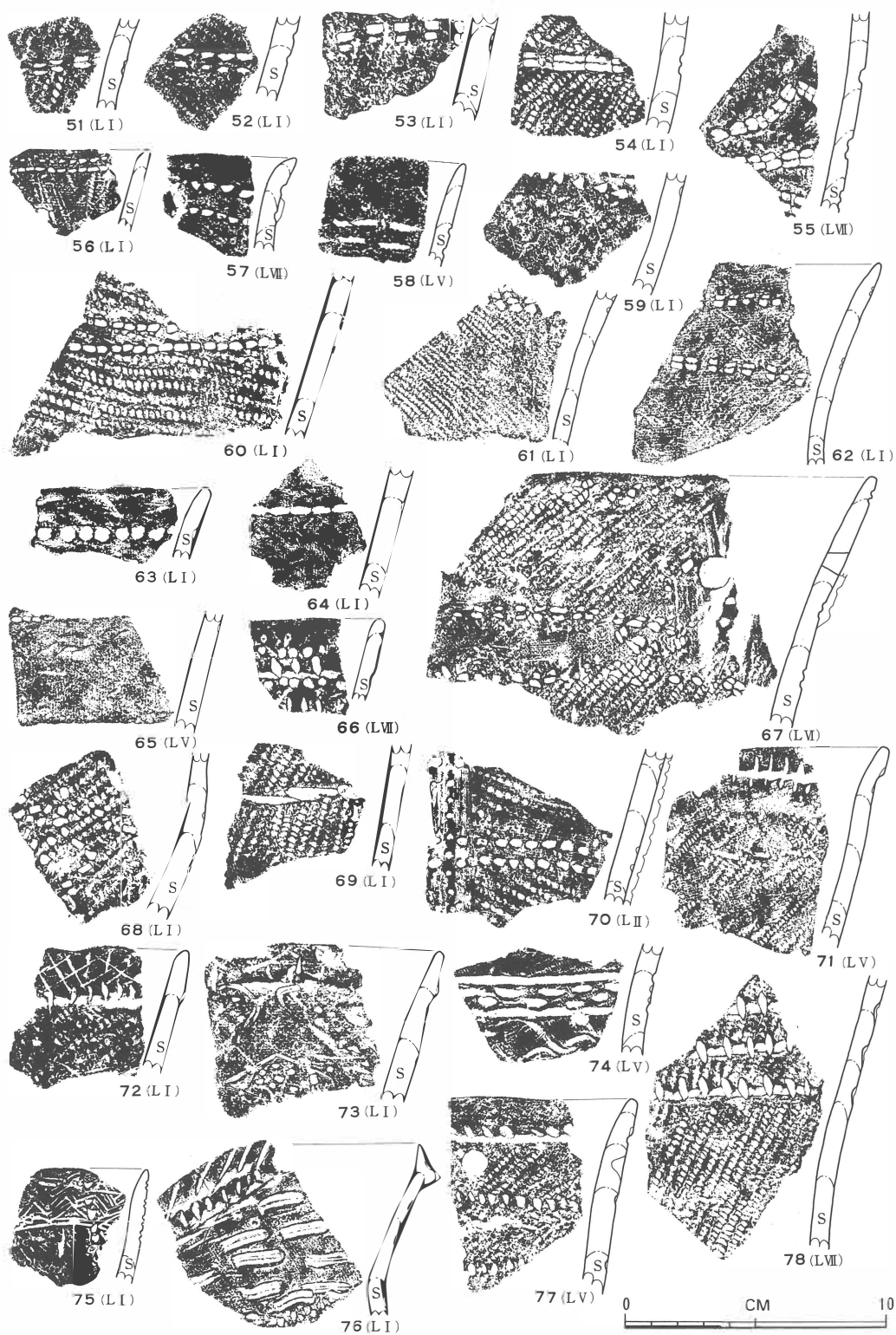
2類a種…主に半截竹管工具を用いて平行沈線文(14)、格子文(9)、鋸歯文(75)、波状文(8・11・13)を施すものである。1類b種に比して竹管の工具幅が狭小化し、直径の小さい半截竹管を使用している。また、モチーフ的にも縦に走る沈線(25)や、斜位に走る沈線(12・25・24・26)が多く



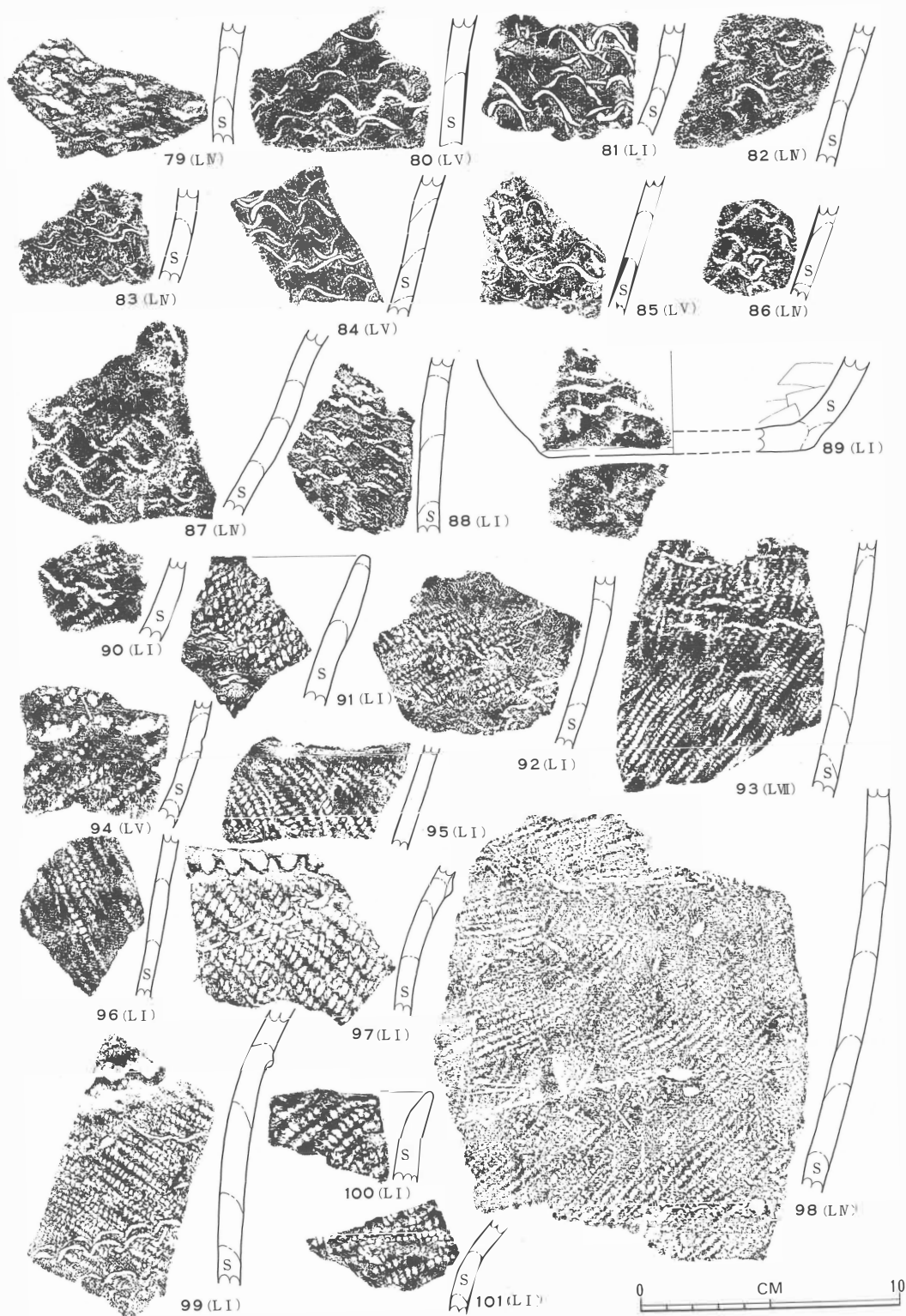
第5図 角部内南台東貝塚出土土器(1)



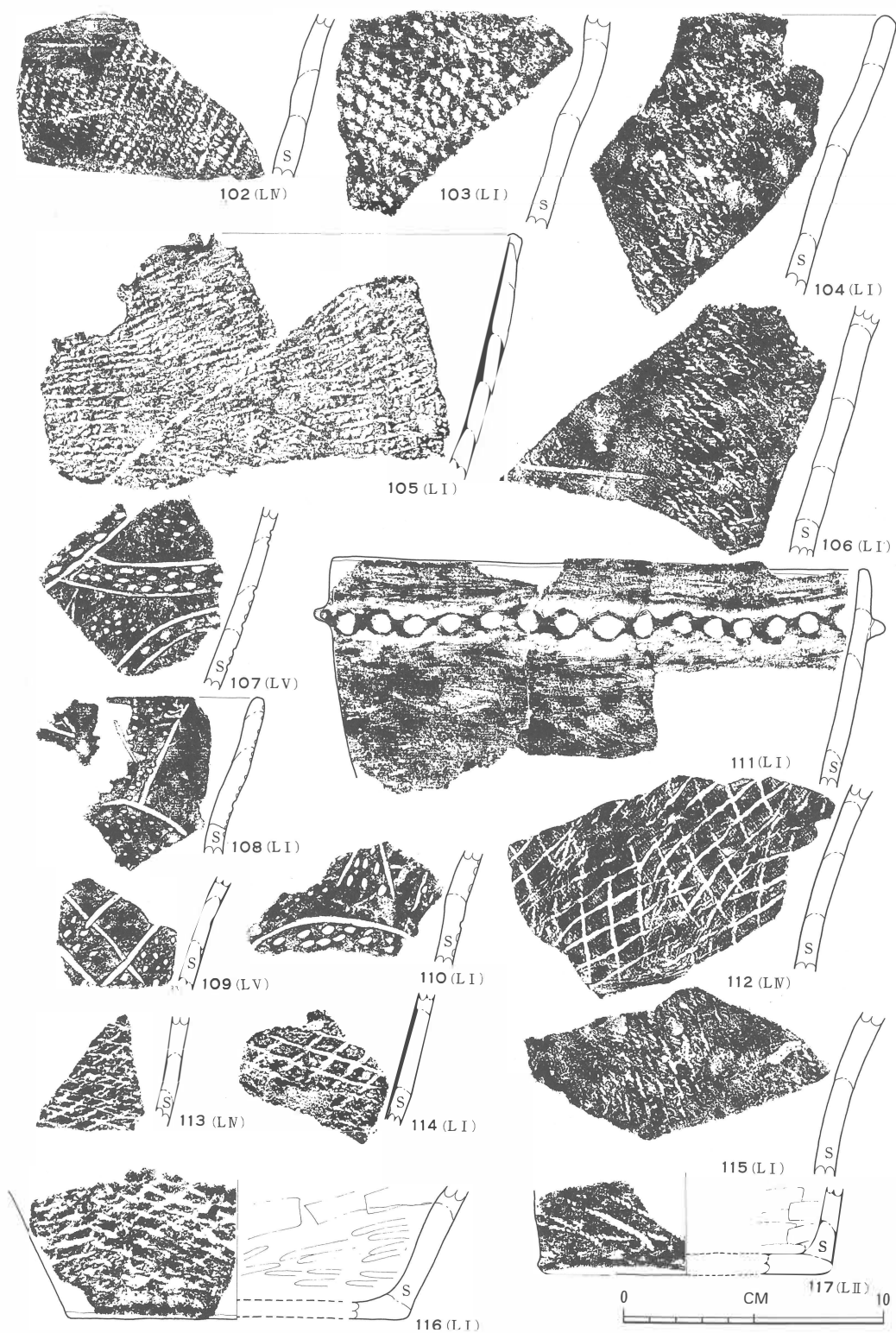
第6圖 角部内南台東貝塚出土土器(2)



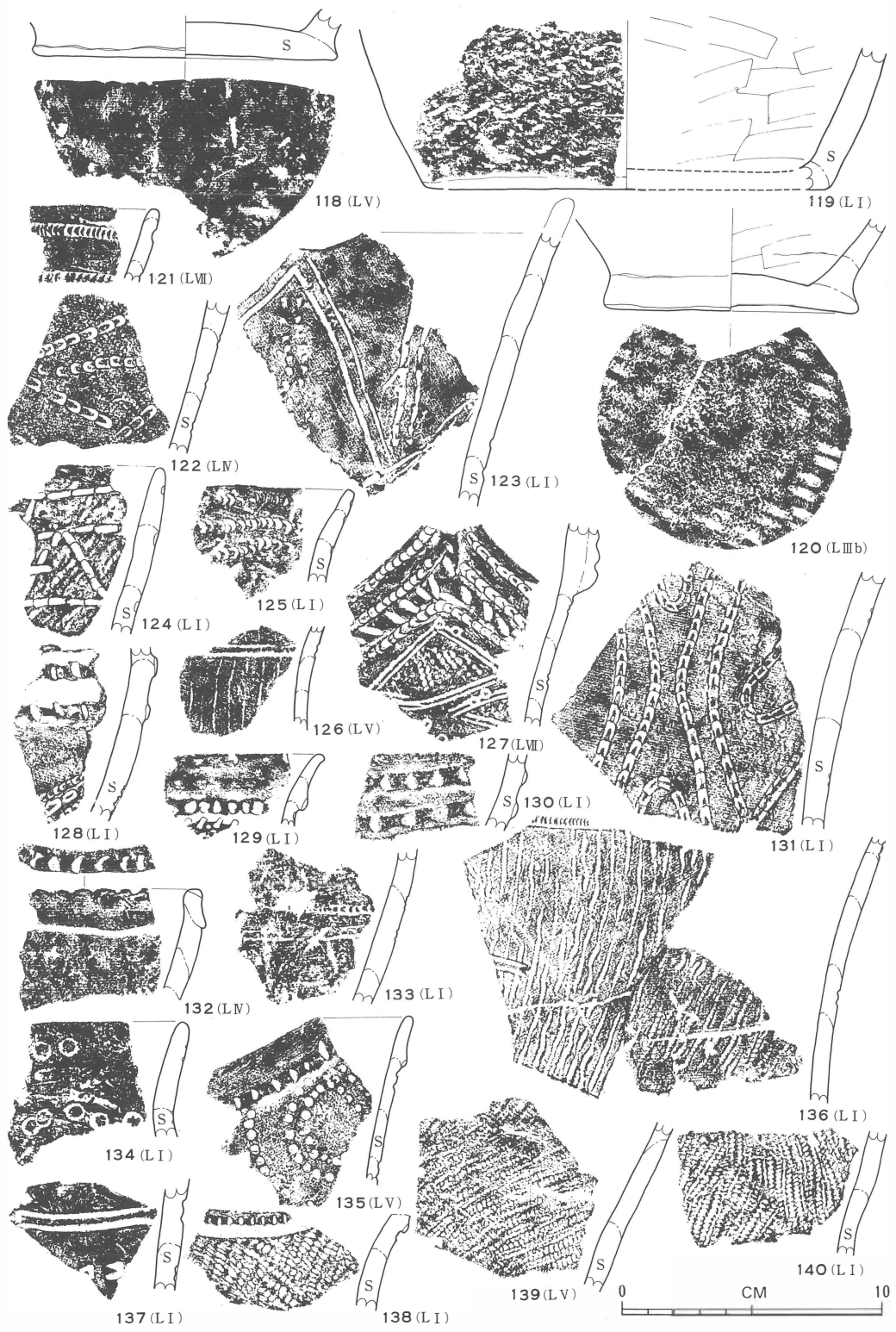
第7图 角部内南台東貝塚出土土器(3)



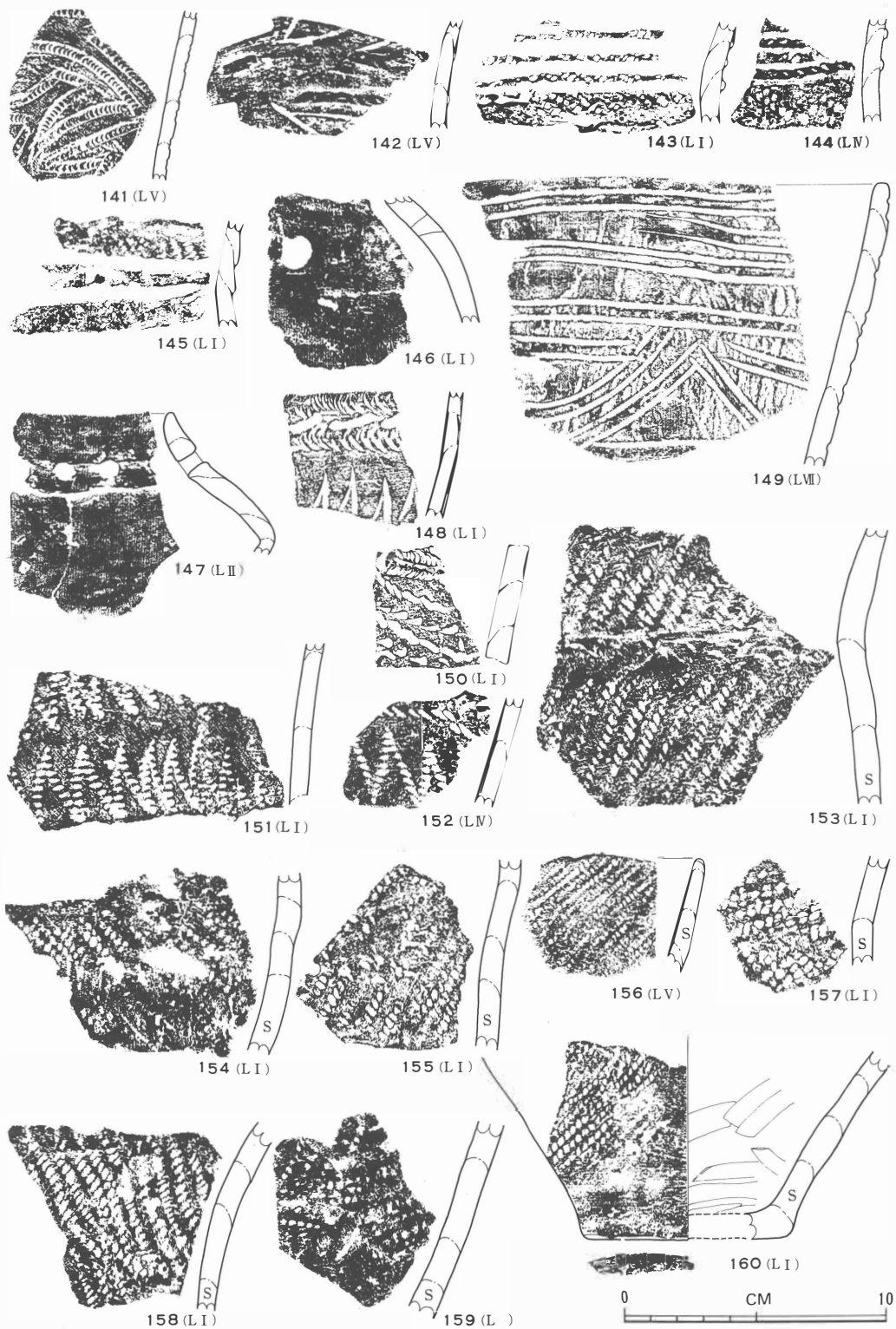
第8図 角部内南台東貝塚出土土器(4)



第9図 角部内南台東貝塚出土土器(5)



第 10 図 角部内南台東貝塚出土土器 (6)



第 11 图 角部内南台東貝塚出土土器(7)

第2節 出土遺物

なる。また、口縁部文様帯に大木2a式からの隆帯が継続発達し、内環状を呈するもの(9)、コンパス文を施すものの隆帯がX字状を呈し刺突を有するもの(18)などがある。

2類b種…口縁部端が肥厚し、折り返し口縁気味になるもので、大部分は口縁部端に刺突を施すものが多い(27・28・30・31・34・71~73・76・77)。刺突技法も爪形(28)、指頭(30・31)、縦長のもの(72・73・76・77)、竹管背部での押し引き(27)などがある。地文では等間隔の不整撚糸文(28・30)、正整の連鎖沈文(27)、縄文(31・34・71・77)、竹管文(73・76)など多用である。34は刺突は持たないものの、器形的に31同様でありこの類に入れた。波状縁を呈しRLの縄文を横位回転している。

2類c種…口縁部や体部に1段~数段にわたり竹管にて列点文を施したもの(51~65・67~70・74・78)。刺突工具である竹管の割り方により、半截竹管の腹部端で刺突したもの(51~56・58・61・62・65・67)と、 $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ 截の幅の狭い竹管で刺突したもの(57・59・60・63・64・69・70・74)の2種類がある様であるが、いずれも器面に対し斜位に刺突している。大木2a式より続く縦位の隆帯をもつもの(57・67)もある。また、70は縦長の隆帯を持ち、隆帯上にも同一工具による刺突を有する。刺突によるモチーフは67・68の如く円形を呈するもの、連弧文を施すもの(55)などがある。地文は縄文が多いが74の如く連鎖沈文もある。

2類d種…地文のみの土器を本類とした。大木2b式比定の最大のメルクマールであるS字状連鎖沈文を施すもの(45~47・50・80~89)、等間隔に不整撚糸文を施文したもの(35~38・40~43・45・48・49・79・119)がある。斜縄文を有するもの(102・103)、網目状撚糸文(104・106・112・117)などもある。105は口縁部に小波状突起を有し、付加縄文を施している。

2類e種…底部のみを本類とした(118・120)。大木2a式~3式の間に入るものと思われるが、出土量の最も多い本類に分類した。120は網代の痕跡を有する。

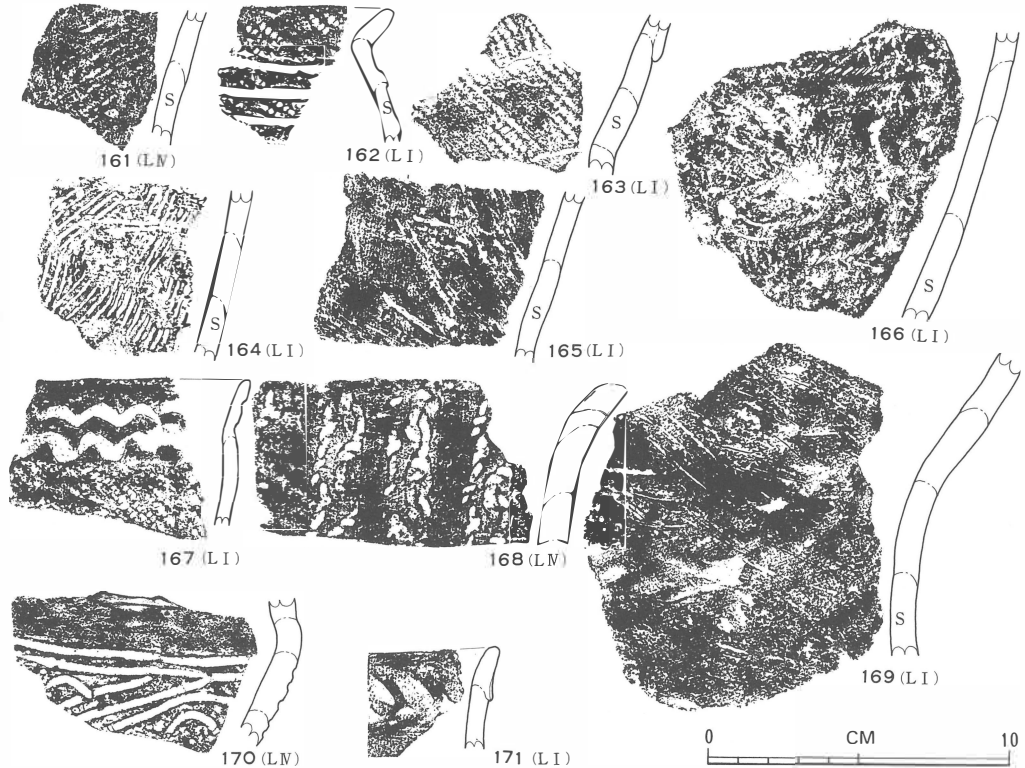
第II群土器—縄文時代前期中葉土器群—

数量的には少ないが、大木系土器、諸磯・浮島系土器が出土している。

1類 大木3式と考えられる土器をまとめた。a~cの3種に分けられる。

1類a種…大木3式比定土器(121~131・133・136・137)である。半截竹管を器面に対し垂直に刺突し連鎖状刺突文を持つ特徴がある。そのため刺突間隔が細くなり、大木2b式期の刺突とは幅・施文技法が異なる。モチーフ的には刺突文を間隔をあけ数段施すもの(121・125・130)、菱形文を施すもの(122・123・131)などがある。また、半截竹管の平行沈線文と組み合わせさせて文様を有するもの(127・136・137)や、隆帯に刺突を施すもの(128・129・138)などもある。132は繊維を若干含み、折り返し口縁で口唇部に竹管の刺突文を有する。地文には124の様に無節縄文や、126・136の撚糸文がある。

1類b種…従来大木3式のメルクマールとされていた円形竹管文のグループである。134は平



第12図 角部内南台東貝塚出土土器(8)

縁で外反する円形竹管の刺突文で弧線を描く。135は波状口縁で口径の小さな円形竹管で同じ円文を描く。いずれも胎土に繊維を含む。

1類c種…地文のみを本類とする。体部に綾絡文を有するもの(90~94・97~99), 付加縄文を施すもの(139・140), 斜縄文(100・101・153~160)を持つもの他, 擦痕を有するもの(165・166・169), 撚糸文を施すもの(161・164)などもある。

2類 大木4式と思われるものである(19・20・22・132・162)。19・20は口縁部文様帯を無文化し, 竹管による平行沈線を施す。この沈線は器面に対し深く加えられている。22・132は口唇部に竹管による連続刺突文を加え, 口縁部文様帯を無文化している。22には綾絡文が施文されている。162は頸部がくの字に屈曲し, 頭部に3条の深い沈線を施している。

3類 諸磯式比定土器を本類とした。141は連続刺突文で木葉文を描いている。142~145は平行する隆帯上に縄文を施文するもの。146, 147は無文土器で有孔土器と思われるものである。

4類 諸磯b式に比定される土器である。平行する細い隆帯上に縄文を施文するもの(142~145)。149は地文に撚糸文を施し, 沈線文で連弧文を描いている。いずれも諸磯b式に比定されると思われる。

第2節 出土遺物

5 類 浮島式土器と思われるもの(148・150～152)。所謂変形工字文を施すもの(148・150)と原体の縄圧痕をもつもの(152)の2種類が知られる。148・150・151は、地文に貝殻腹縁文を施文している。

第Ⅲ群土器－縄文時代前期後葉土器群－

1 類 167は大木5式と思われる。平縁で太い沈線で2段の波状文を施す。地文はRLの斜縄文である。

2 類 大木6式に比定される土器である。170は屈曲する頸部を持ち、頸部を無文化し2本の横走沈線以下蕨状の沈線文を施す。171は口縁部資料で、肥厚した口縁部端部に指頭により斜位の押圧を施している。

第Ⅳ群土器－縄文時代中期前葉土器群－

本遺跡では第Ⅰ・Ⅴ群に次いで出土量の多い土器群である。従来大木7a・7b式の良い資料は少なかったが、近年宮城県教育委員会による小梁川遺跡の調査において、遺物包含層より多量の土器の出土を見た。今回はその資料に鑑み分類を行った。

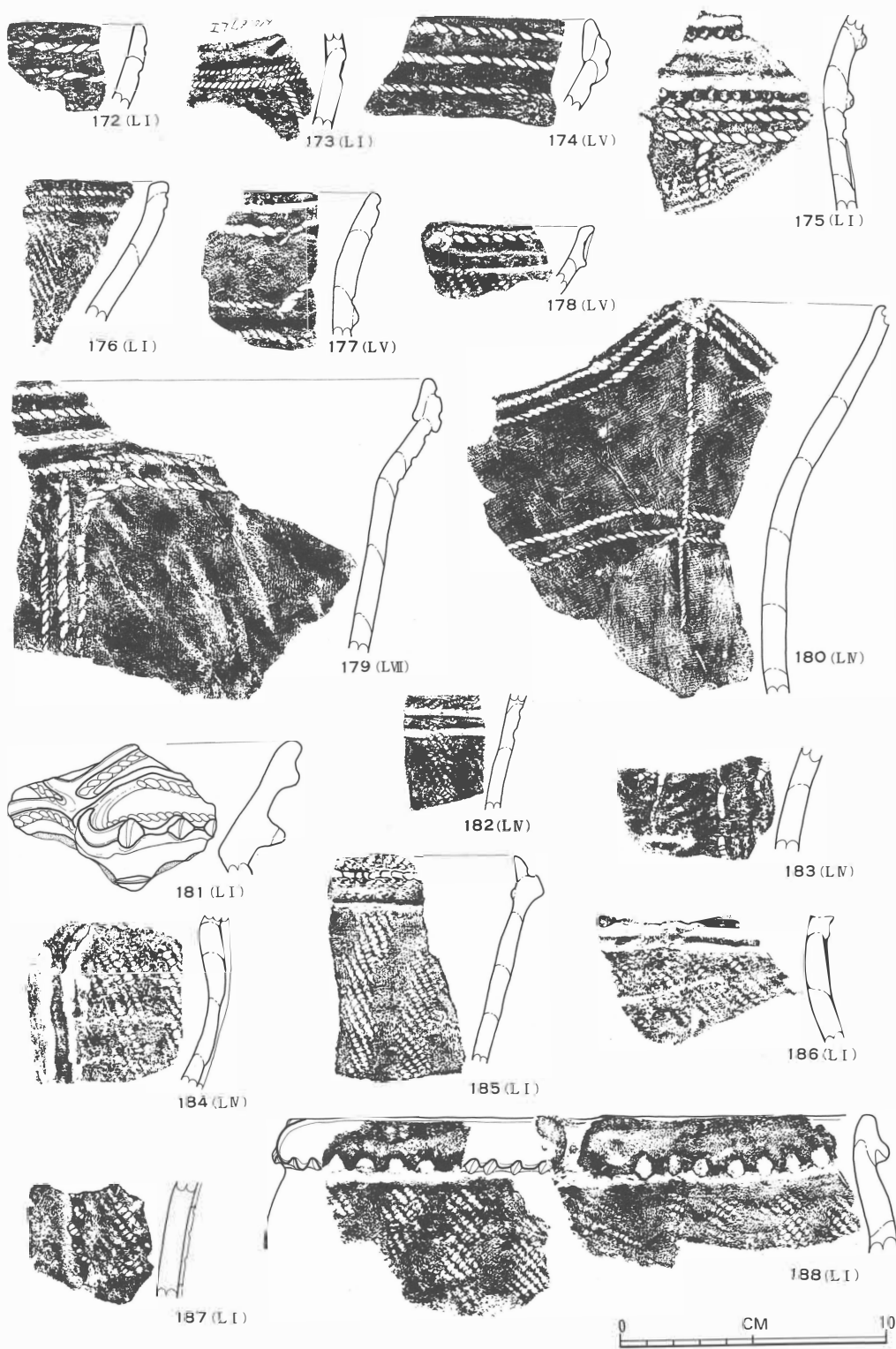
1 類 大木7a・7b式土器を本類とする。10種に細分される。

1 類 a 種…主な文様モチーフが押圧縄文によって施されるものである(172～181)。172・174・176は口縁部に縄文原体の側面圧痕文が横位に施文されており、175・179は隆帯を組み合わせている。また、178はコノ字状の狭い枠の中に押圧を施す。180は波状口縁で、中央より縦に垂下した押圧縄文に交差する様に、口縁部及び胴部に横走する押圧縄文を有する。181は、175・179同様隆帯間に押圧縄文を施す。下段の隆帯には刺突を持つ。器形的には深鉢が大部分であり、内湾気味に立ち上るものが多い。

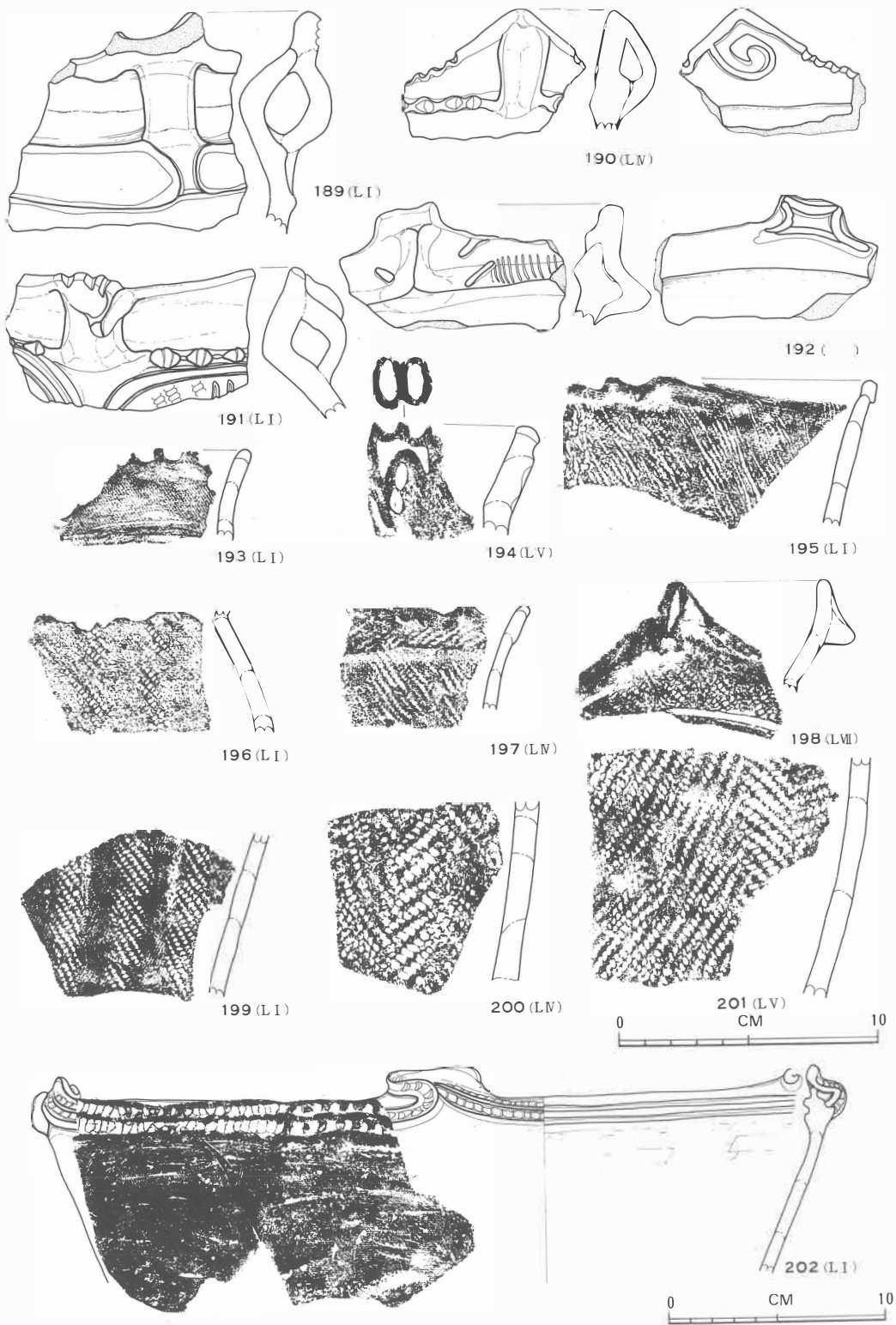
1 類 b 種…横走する沈線もしくは隆帯の区画で、口縁部と胴部文様帯を区切るものである。182は2条の沈線、185は口縁部資料で、屈曲した狭い口縁部に有節沈線を施している。186は2条の隆帯を横走させ、隆帯端に沈線を巡らす。いずれの資料も、胴部文様帯は縦位回転の縄文を施文している。

1 類 c 種…胴部資料のみで、縦位に隆帯を施すものを本類とした。184は輪積み痕が顕著に残るもので、223は隆帯両側に隆帯と平行する沈線を施す。187は、縦位の隆帯上に縄文原体の側面圧痕文を施している。いずれも地文は、LRの縦位回転施文である。

1 類 d 種…大型波状縁を持つ口縁部資料を本類とした。193は波頂部に刻みを有し、口縁部は無文化している。194は波頂部に一对の縦長の袢り込みを入れ、器面外面には鎖状の隆帯を垂下させ、隆帯内部に刺突を施している。



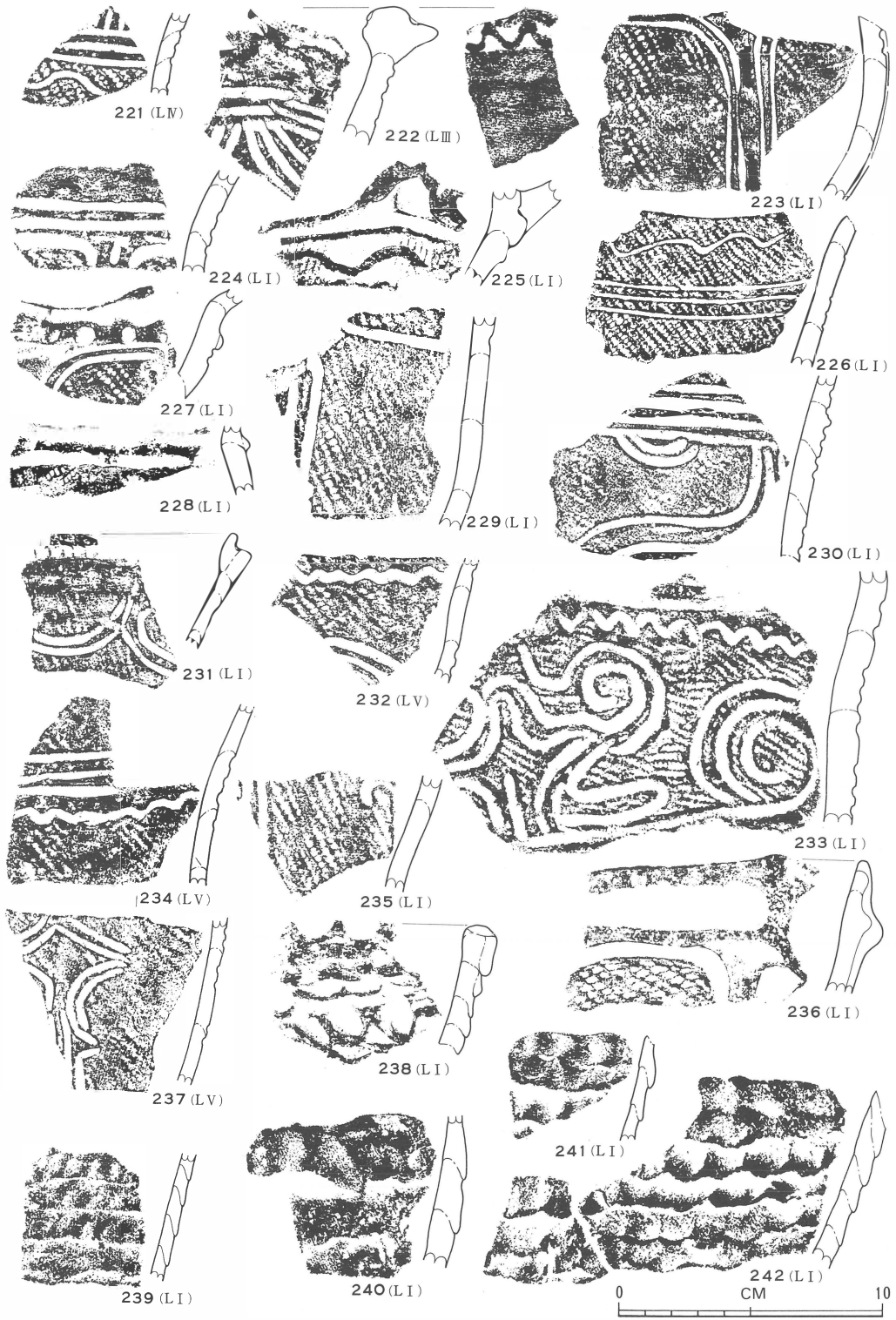
第 13 図 角部内南台東貝塚出土土器(9)



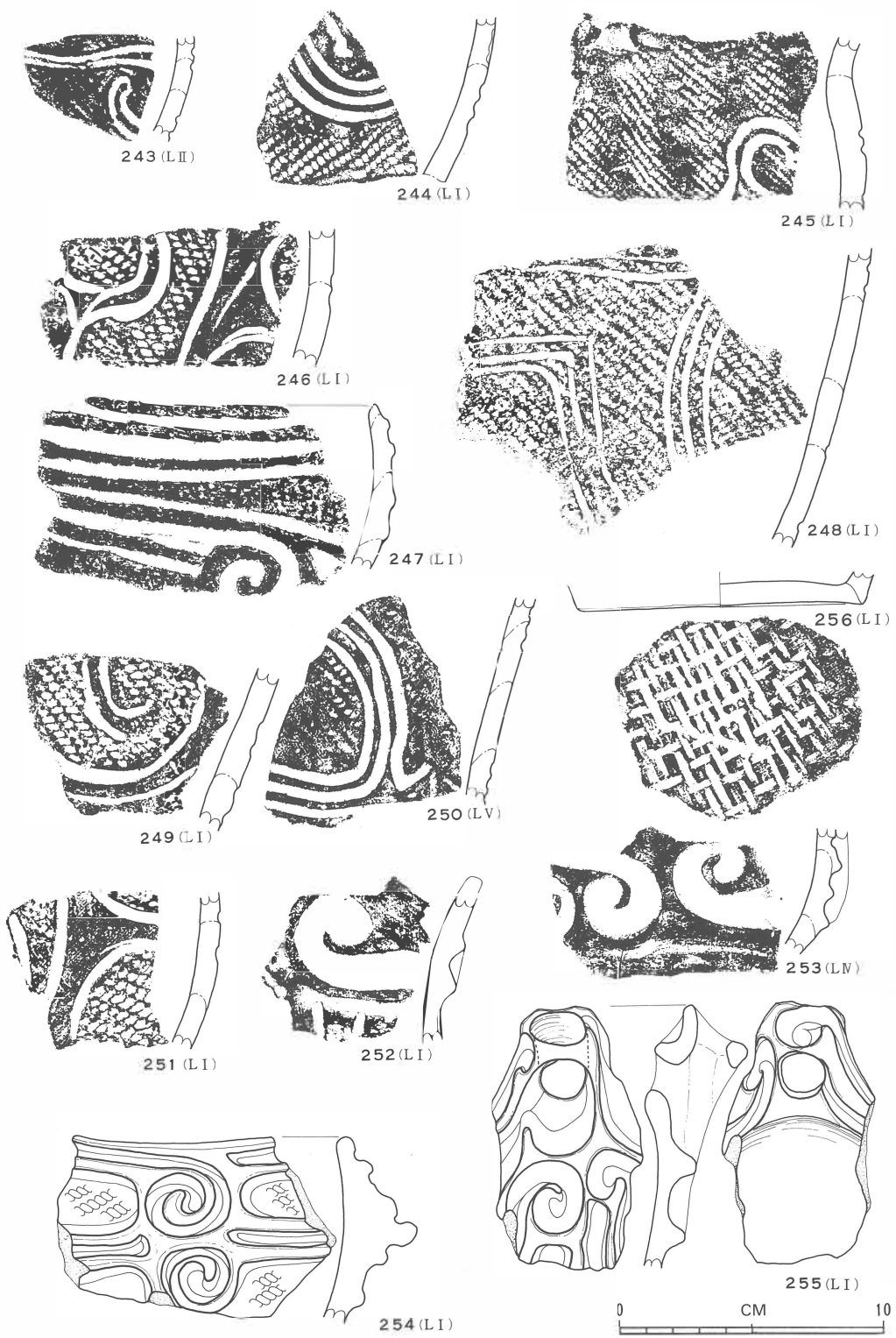
第 14 図 角部内南台東貝塚出土土器 (10)



第 15 図 角部内南台東貝塚出土土器 (11)



第 16 図 角部内南台東貝塚出土土器 (12)



第 17 図 角部内南台東貝塚出土土器 (13)

第2節 出土遺物

1類e種…交互刺突文を持つものを本類とした。207の1点のみ知られる。頸部資料で、くの字状に屈曲する変曲部に横走する隆帯を巡らせ、隆帯上下に三角形状の交互刺突文を施している。

1類f種…口縁部が把厚し、折り返し口縁ぎみになる土器である(188・208・211)。把厚した口縁部は、楕円形状の区画文を対峙させ(188・211)、口縁部端部に刺突を加えている。211のように、胴部文様帯にも一巡する隆帯上に口縁部と同一工具で刺突文を加えるものもある。いずれの土器にも、LRの縦位回転縄文が施文されている。

1類g種…頸部がくの字状に屈曲し、口縁部に橋状突起が施されるものである(180~191)。橋状突起の起点部を頸部文様帯である横走する隆帯上に接合させ、隆帯上に比較的大きな刺突文を施すもの(190・191)と、楕円形状に区画された隆帯上に接合するもの(189)がある。190は口唇部にも刺突を加え、裏面には細い粘土紐による渦巻文を持つ。

1類h種…横走する隆帯により口縁部文様帯を区切り、幅狭な口縁部文様帯に刺突文を施すものである(192・214)。192は波状突起を有し、口縁部より垂下する隆帯を持つ。また裏面には、細い粘土紐による台形状のモチーフを有する。214は2列の短い刺突文を加えている。

1類i種…隆帯を主に文様モチーフとするものである(195・198・225・228)。195は、口縁部に波状を呈する粘土紐を貼り付け以下撚糸文を縦位に施文している。198は、波状突起を施し、縦長の刺突を加えている。225も口縁部に突起を持ち、頸部文様帯に隆帯による波状文を施している。

1類j種…地文のみの土器を本類とした(195~197・199~201)。195と197は口縁部資料で他はいずれも胴部資料である。195は口唇部に波状の棒状の粘土紐を貼り付け、以下撚糸文を施している。197は、折り返し口縁ぎみに把厚する口縁部文様帯にLRの横位回転、胴部にLRの縦位回転を施している。196・199~201は、いずれもLRの縦位回転施文である。

第V群－縄文時代中期中葉土器群－

1類 大木8a式比定土器群である。施文技法、器形、文様モチーフ等になり5種に分類される。

1類a種…主な文様モチーフとして沈線文を多用する土器である(215~219・221・222・224・228~234・237・243~245)。モチーフ的には上向きの弧状沈線を描くもの(216・222)、横走する波状沈線文が描かれるもの(217・221・232~234)。渦巻文と縦に垂下する二対の連弧文を施すもの(233・237)などがある。器形的にはいずれも深鉢を呈する。地文ではLRの縦回転(217・229・230・232・234・237・245)が多く、233の様にRLの横位、斜位回転施文の土器もある。2条~3条の沈線で渦巻文を描くもの(243~245)もある。

1類b種…口縁部文様帯に一重の渦巻文を持つ土器である(209・210・212・213)。210・212は、

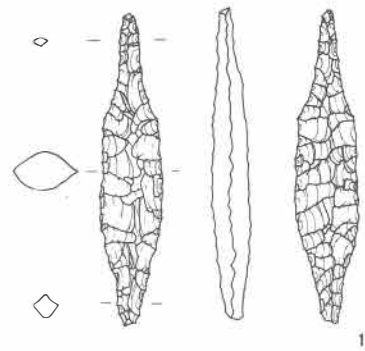
上方に向いた口唇部中央位に渦巻文を配し、左右を有節沈線(210)や刺突文(212)を加えている。また、212は渦巻文直下に数本の弧線で円文を施し、左右に弧線を配している。209は波状縁の波頂部両側面に、巻方向の異なる一重の渦巻文を加え、頸部から胴部にかけて波状沈線を垂下させている。213は口縁部内外面に渦巻文を施し、枠状の区画内部にRLの縄文を、横位もしくは縦位に施文している。器形的には213がキャリパー状になる他は、ゆるやかに外反する深鉢を呈する。

1類c種…有節沈線で文様モチーフを描くものである。202は浅鉢であり、四対の四角形の突起を配し、口縁に沿って2列の有節沈線で弧線文を描いている。胴部文様は横方向の擦痕が不規則に認められる他は無文である。裏面に2条の沈線を巡らしている。

1類d種…無文土器を本類とした。220は頸部が屈曲し、口縁が若干内湾する浅鉢である。外方に張り出した口縁部に、円形の刺突文を口縁に沿って施している。205はキャリパー形を呈し、204は幅広の段を有する。203～206はいずれも深鉢である。

1類e種…粘土紐の積み上げ痕を残し、痕上に指頭等による押捺が施されたものである(238～242)。いずれも深鉢であり、裏面は外面に比して積み上げ痕が顕著ではない。238は口唇部にも押捺が加えられている。

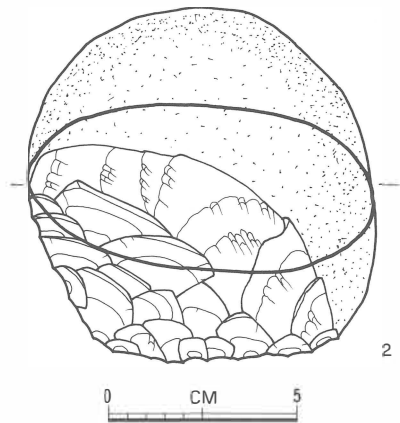
2類 大木8b式比定土器である(226・246～250)。1類に比して文様帯が横方向もしくは縦方向に展開してゆく特徴を有する。226・248は細い沈線で数条の平行沈線を巡らせ、波状文(226)やクランク状の文様(248)を施している。246・249・250は、数本の沈線で渦巻文や弧線を描き、沈線間に研磨調整を加えている。



第Ⅵ群土器—縄文時代中期後葉土器群—

1類 口縁部文様帯を有するもので、隆沈線で252～254の様に横に展開する渦巻文と、255の様に縦に展開する渦巻文がある。254は、渦巻文と楕円形区画文が2対組み合わさって文様を構成している。区画文内には、RLの縦位回転縄文を施文している。

2類 胴部資料のみを本類とした。251は、恐らく円形区画文と楕円形区画文が縦位に展開するものと思われ、区画内にLRの縦位回転縄文を施している。(吉田)



第18図 角部内南台東貝塚出土土器

第2節 出土遺物

2 石 器

今回出土した石器は非常に少なく、Ⅳ層より出土した2点を図化した。

1は石錐と思われ、表裏面ともに丁寧な剝離調整を施している。最大長8.2cm、最大幅1.7cm、最大厚1.0cmを計測。石質はチャートである。

2は、礫石器であり、両面から1～2回の剝離調整によって刃部を作り出している。最大長9.4cm、最大幅8.3cm、最大厚4.2cmを計測する。安山岩質系の石材である。 (吉 田)

3 自 然 遺 物

今回の調査のきっかけとなったのが法面に露呈した貝層であった。調査の結果これらの貝層はLⅢ層と認識される長径1.2m、厚さ30cm前後のブロック状を呈する混貝土層であることが判明したが、混在している土器片には第Ⅰ～第Ⅴ群土器が認められる。しかしこれらの土器類の中では第Ⅴ群土器が最も新しい時期のものであり、かつ量的にも多いので、LⅢ層の形成は第Ⅴ群土器の年代、つまり縄文時代中期中葉の大木8aないし8b式期と考えておきたい。したがってLⅢ層出土の自然遺物についても同様の年代を想定することができよう。

LⅢ層の東端は既に工事によって破壊されており、その本来の拡がりには明らかにできないが、混貝土層の残存状況からみても、せいぜい東西方向でも1.5m程度のもと思われる。調査区北西側の段丘面上に認められる貝層との連続性はなく、その成因も斜面への一時的投棄として理解すべきであろう。なおLⅡ・Ⅳ層の中にもわずかながら自然遺物が含まれていた。

LⅢ層混貝土層についてはその土壌を全て袋づめにして収集の上、最終的には1mmメッシュのフルイにかけ水洗選別し、サンプリングを実施した。この作業によって得られた動物遺存体は平箱半分程度の量である。現在整理作業を進めているが、同定が完了していないので詳細な報告は機会を改めて行うこととするが、現在までに同定できた動物遺存体の種名を一覧表として下に示しておく。

角部内南台東貝塚出土の動物遺存体種名表

I 軟体動物 *Mollusca*

a 腹足綱 *Gastropoda*

- 1 キサゴ *Umbonium costatum*
- 2 アカニシ *Rapana venosa*
- 3 レインガイ *Reishia bronni*

b 二枚貝綱 *Bivalvia*

- 1 マガキ *Crassostrea gigas*

- 2 アサリ *Ruditapes philippinarum*
- 3 ハマグリ *Metatrix lusoria*
- 4 オキシジミガイ *Cyclina sinensis*
- 5 カガミガイ *Phacosoma japonicum*

II 脊椎動物 *Vertebrata*

a 硬骨魚綱 *Osteichthyes*

- 1 スズキ *Lateolabrax japonicus*
- 2 マダイ *Pagrus major*
- 3 クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

b 鳥綱 *Aves*

- 1 ガン・カモ科の一種 *Anatidae gen. et sp. indet.*

c 哺乳類 *Mammalia*

- 1 ニホンジカ *Cervus nippon*

これらの中で圧倒的に多くの量を占める動物遺存体はアサリであり、貝類の構成でみる限り、これらの貝層を残した縄文中期中葉の周辺の自然環境が、砂泥底の干潟を形成していたであろうことが読みとれる。

(玉川)

第3章 ま と め

第1節 貝層と小高町の貝塚

角部内南台東貝塚の今回の発掘調査は、崩落防止工事に伴う小規模なものであった。貝層を発見した当初は、工事区域がこの貝塚の貝層そのものを大きく含むものではないかと心配したのであったが、結果的には小規模なブロック貝層だけの破壊で済んだことは幸いというべきであろうか。貝層が検出された斜面は、斜度60°近い急斜面であった。そのためか調査区内の遺物包含層の大半は、二次堆積層と考えられる堆積状況を示し、したがって各層には縄文前・中期の土器片が混在して出土した。しかしLⅡ・Ⅲ層は、その遺存状況から判断するに、二次的な流出から逃れたプライマリーな層であると思われる。LⅢ層はアサリを主体とする混貝土層であるが、内部には最も新しい土器類として第Ⅴ群土器が含まれており、このブロック貝層の形成時期を縄文時代中期中葉の大木8aないし8b式期と考えたのはここに理由がある。

ところで角部内南台貝塚は、東貝塚と南貝塚で構成される貝塚である。貝層の表面散布状況からいえば、東貝塚は東側段丘崖に近い段丘面上に、南貝塚は段丘崖斜面上に形成されている可能性が強い。しかし残念なことに、この両地点の貝塚は、今までに正式に調査されたことがなく、貝層の正確な形成時期を把握することができないのである。したがって今回調査したブロック貝層は、その位置的な関係からいえば東貝塚と関連する貝層である可能性はあるものの、その詳細な関係は、東貝塚の貝層の形成時期が明らかになった段階で考えるべきであろう。

前述したように、小高町には小高川流域に形成された貝塚群と、宮田川流域に形成された2つの貝塚群がある。これらの貝塚群は年代的には縄文前期初頭以降、晩期に至る各期をどこかの貝塚で認めることができる。前期初頭と考えられる宮田貝塚や北原西貝塚ではキサゴの占める割合は高いものの、前期中葉以降後期に至る多くの貝塚はアサリを主体とし、晩期中葉の浦尻小迫貝塚ではヤマトシジミが主体となることは表面観察から推測される。2つの貝塚群が形成された、そのバックグラウンドであった両河川流域の自然環境も、縄文時代の各時期において変化したであろうことは、このことだけでも明らかであるが、その変化の具体的な様相については、いくつかの貝塚の調査が進んだ段階で論ずるべきであろう。そして角部内南台東貝塚を含め、両河川河口域の、恐らくは潟湖的自然環境を舞台として展開されたであろうこれらの時代の漁撈活動の実体は、今後の調査とともに明らかになるものであろう。

LⅢ層中の自然遺物は、わずかな獣骨・魚骨を含むものであるが、これらの課題にいくらかでもアプローチできる資料である。同定が完了した段階で、改めてとりあげたいと思う。(玉川)

第2節 出土土器について

角部内南台東貝塚出土の土器は、縄文時代前期・中期を主体とする。これらの土器は、第2章に於いて26群12類に分類された。これら分類された内、本節では、今まで比較的資料の少なかった土器、第I群2類について若干考察を加えることとする。

第I群2類は、縄文前期前葉大木2b式に比定される。該期の論考としては教科書的存在となっている興野氏の論(1968)を基軸にし、今回の大木2b式の内容について触れてみたい。

興野氏の論で大木2b式の内容は以下の通りである。

- ① 不整撚系文が等間隔の平行綾洛文になる。
- ② 正整なS字状連鎖沈文が完成する。
- ③ 装飾文としては隆帯、刺突文、刻線粘土紐貼付文、点列が多くなる。
- ④ 大木2b式と3式を比べた場合、刻目の手法が異なっており、2b式では斜めから押しつぶし、3式では垂直に細切する。

今回の資料は、これらの諸特徴を有し、興野氏の卓見を更に補強することとなった。本遺跡出土の土器の特徴をこれらの内、③と④の問題に触れながら該期の内容を検討してみよう。

文様帯を有するものには3つの種類がある。すなわち、口縁部を肥厚させ肥厚部端に刺突を有するもの(2類b種)と横走する隆帯に指頭等で円形もしくは楕円形状の刺突を施すもの(18, 111)、1段～数段に平行する列点文を施したものの(2類C種)である。2類b種は、いわき市弘源寺貝塚第6群土器(佐藤 1986)、会津高田町冑宮西遺跡Ⅲ群2類土器(芳賀 1984)と比較すると次の様な差異が認められる。弘源寺6群や冑宮西Ⅲ群2類では、狭い口縁部文様帯に横位もしくは縦位の細い隆帯が巡るが、2類b種では、口縁部端が肥厚する。又、刺突では前二者が、口縁部の縦位隆帯上に施されるが、横位隆帯上には施されないのに対し、後者では肥厚部端に縦長の刺突文を施す。又、太い粘土紐上に刺突を施すものは、弘源寺・冑宮西例ではない。更に、2類C種の様に、平行して数段にわたる列点文も検出されていない。これらの列点文は口縁部～胴部にまで施され、77の様に肥厚した口縁部端との列点と平行して胴部に刺突するものもある。この種の土器は、近年宮城県利府町六田遺跡(庄子 1987)での出土がある。それによれば、狭い口縁部文様帯に列点刺突文を施すものから、体部にまで列点を施すものへの時間的変遷が認められている。又、55や67・68の様に列点文で孤線や円文を施す例は広谷地B遺跡図版11・12に更に発展した意匠文として見られる。論考した馬目氏は、当資料を大木2b式後葉～その直後の時期にあてている(馬目 1979)。

次に刻目の技法的問題としてあげられた④は、2類b種と第Ⅱ群1類a種で明らかな様に、刺突の器面への角度が異なり、間隔の広い刺突から間隔の狭い刺突へと移行する。興野氏の考えを

第2節 出土土器について

裏付ける事となった。以上の様な事から該期の変遷は概略として以下の様にとらえられると思われる。大木2a式より続く、口縁部に横位・縦位の隆帯で狭い文様帯を施し刺突を加える技法は、2b式期になると、更に隆帯を発達させ太い隆帯を施し、指頭等で隆帯上に刺突を加えるものと、横位隆帯の退化の様な口縁部端が肥厚し縦長の刺突を加えるものになる。そして列点文が多用され、口縁部～胴部までと文様帯の幅が拡大するものもある。列点文は平行する数段のものから意匠文を有する様になる。本遺跡出土の土器はこの様な変遷の中で形成された資料と考えられる。今回、地文の問題については触れる事がなかったが、興野氏の論が充分に背首できるものの縄文や撚糸文、綱目状撚糸文等バライティに富む様である。

以上、縄文前期の資料を取り上げ論じたが、本遺跡では該期以外に縄文前期後葉や中期前葉の土器の出土もある。これらについては、種々の制約上検討できなかった。今後の課題とし、関係各位のお許しを請いたい。

(吉 田)

参考・引用文献

- 興野 義一 1968 「大木式土器理解のために(Ⅱ)・(Ⅲ)」『考古学ジャーナル16・18』
竹島 国基 1971 「小高町の原始・古墳文化と考古資料」『小高町史』
渡辺 一雄他 1975 『東北自動車道遺跡調査報告(八巻腰巻遺跡)』 福島県教育委員会 日本道路公団
馬目 順一 1979 『廣谷地B遺跡調査報告』 葛尾村埋蔵文化財調査報告第1冊
松本 茂他 1982 『母畑地区遺跡発掘調査報告X(七郎内C遺跡)』 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
長島 雄一他 1983 『赤沼遺跡試掘調査報告』 原町市教育委員会
芳賀 英一他 1984 『冑宮西遺跡』 会津高田町教育委員会
鈴木 良一他 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告V(上ノ台A遺跡)』 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
松本 茂他 1985 『堂平B遺跡』 玉川村文化財調査報告書第2集
小川 出・村田 晃一 1986 『今熊野遺跡Ⅱ』 宮城県教育委員会
渡辺 一雄・佐藤 典邦 1986 『弘源寺貝塚』 いわき市教育委員会
松本 茂 1986 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ(岩下D遺跡)』 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
相原 淳一他 1986 『小深川遺跡―遺物包含層土器遍一』 宮城県教育委員会 建設省セツ宿ダム工事事務所
玉川 一郎 1986 「福島の縄文期製塩土器」『福島の研究1 地質・考古編』 清文堂
庄子 敦他 1987 『菅谷 六田遺跡』 利府町教育委員会 宮城県住宅供給公社

図 版

旬平電子印刷所特許
オフセット印刷方法
54：116034

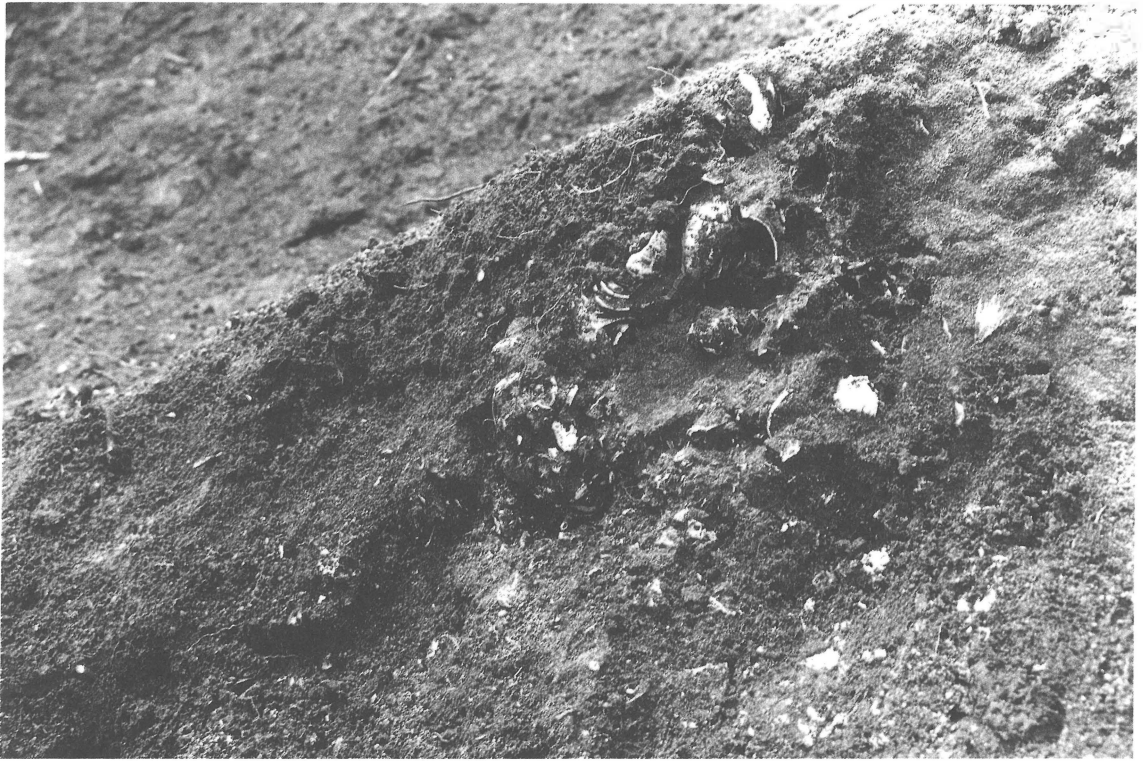




角部内南台東貝塚遠景



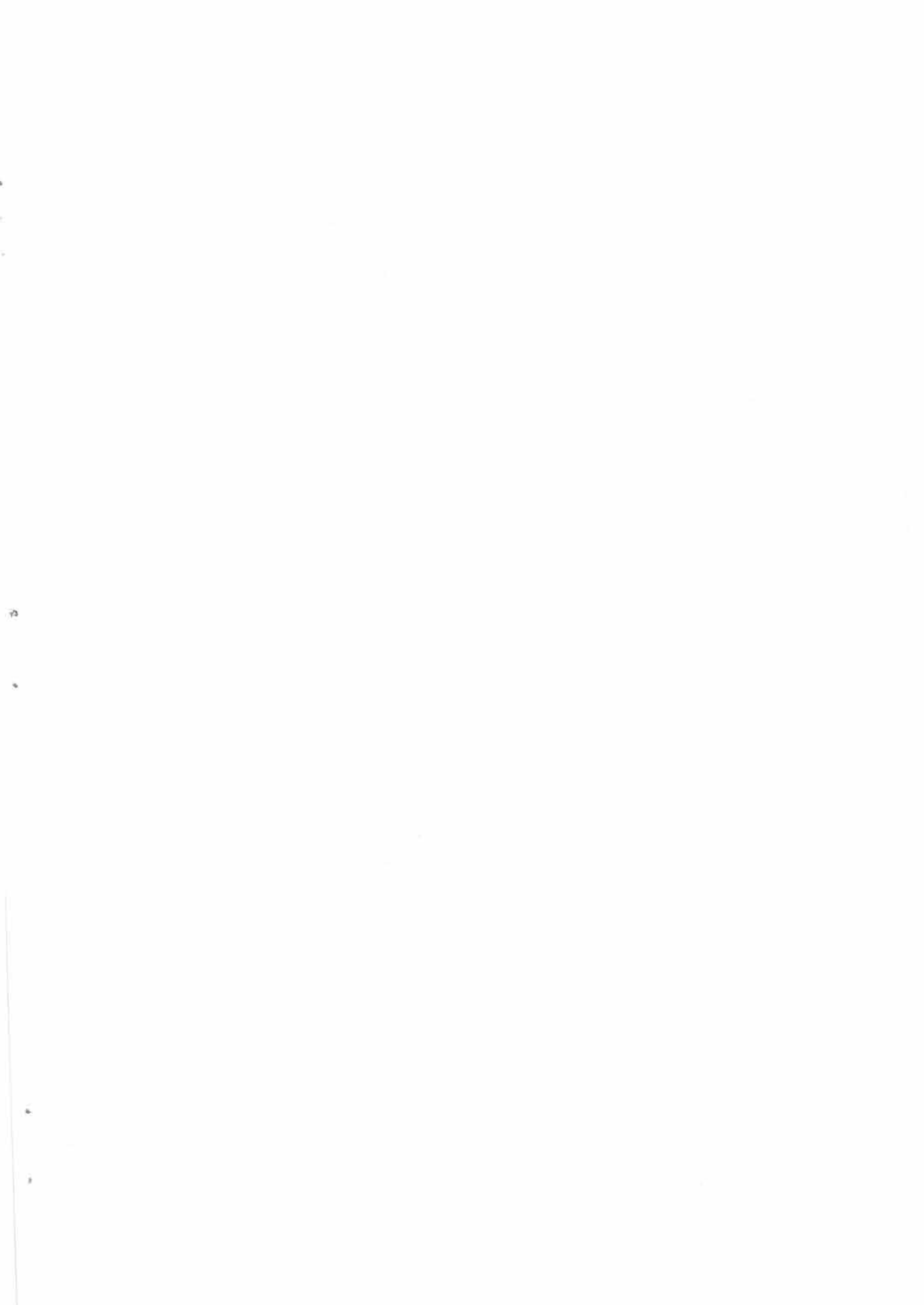
角部内南台東貝塚調査地点

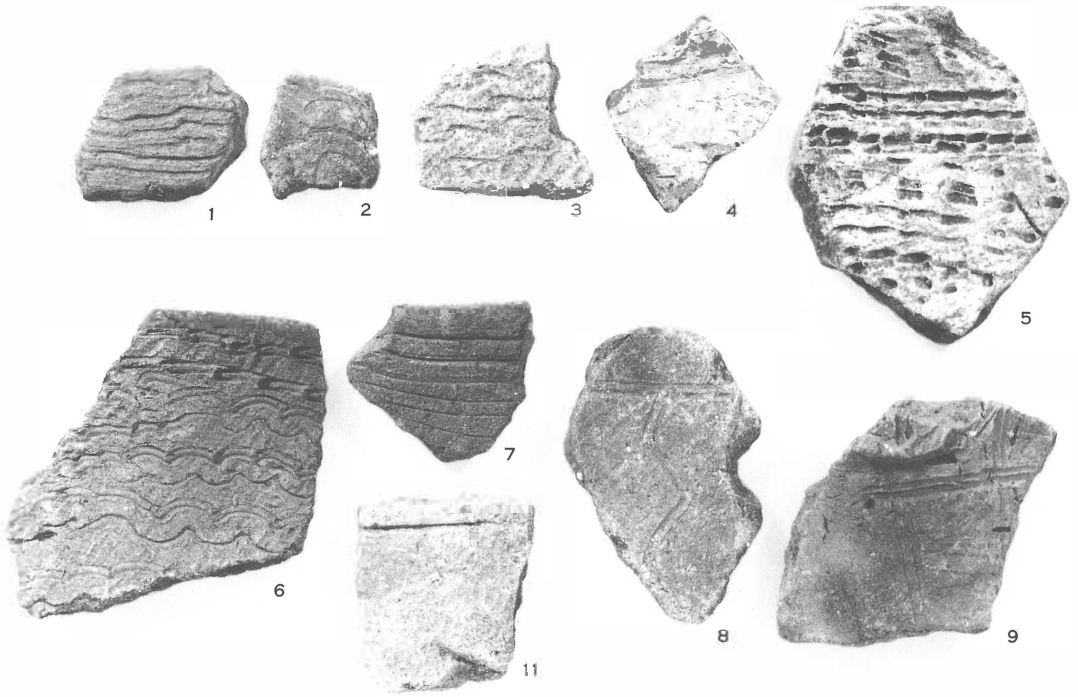


調査区貝層の状況

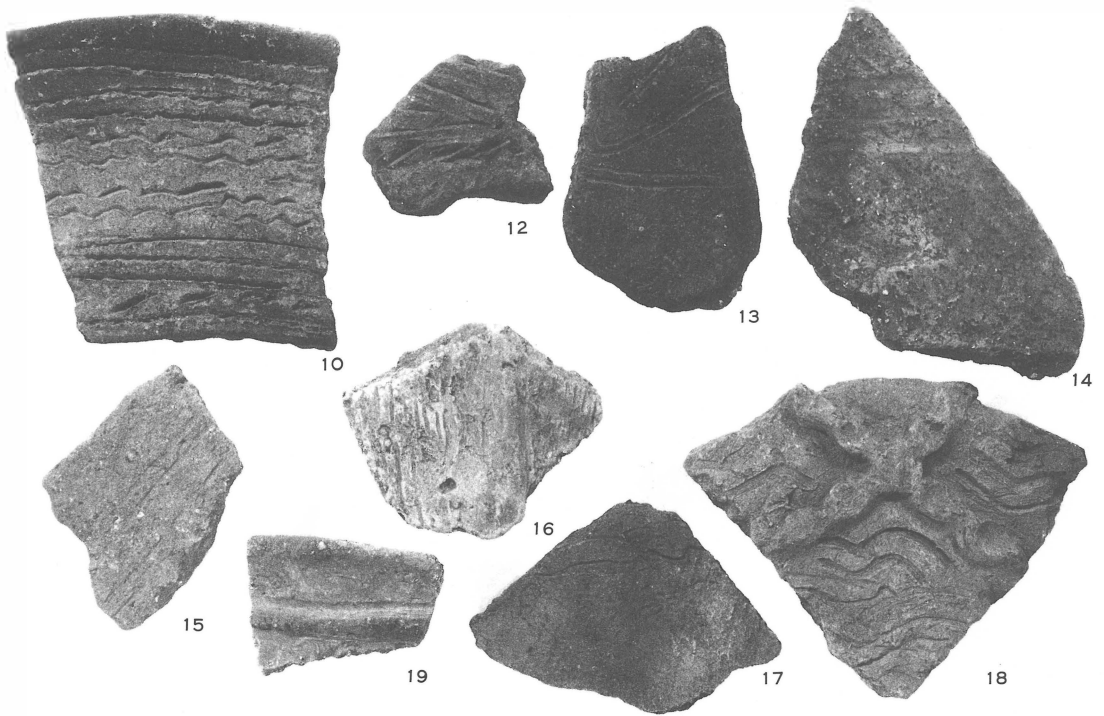


調査区南壁の状況

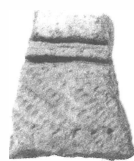




繩文土器(1)



繩文土器(2)



20



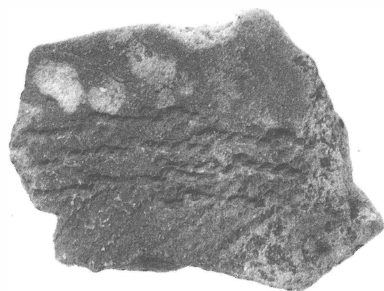
26



22



24



23



25



21

縄文土器(3)



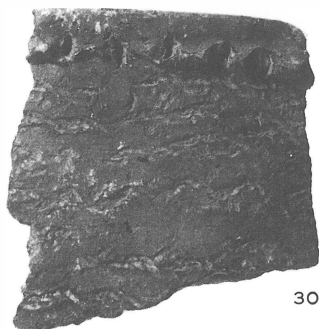
27



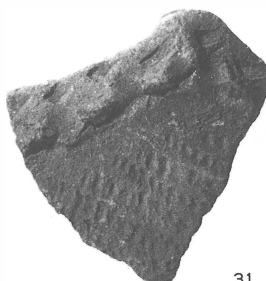
28



29



30

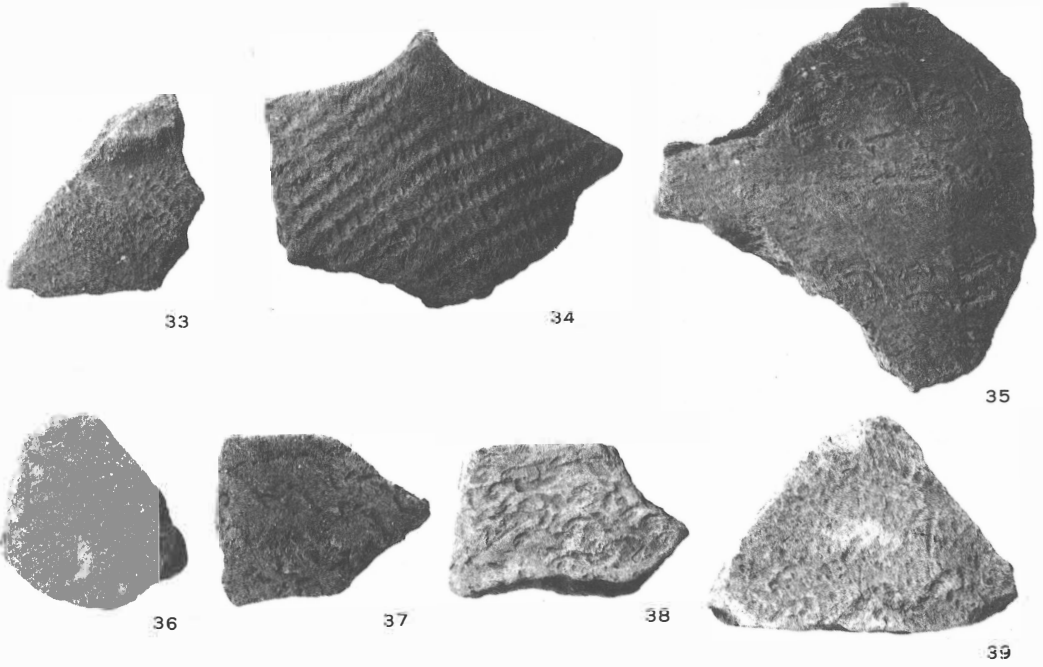


31

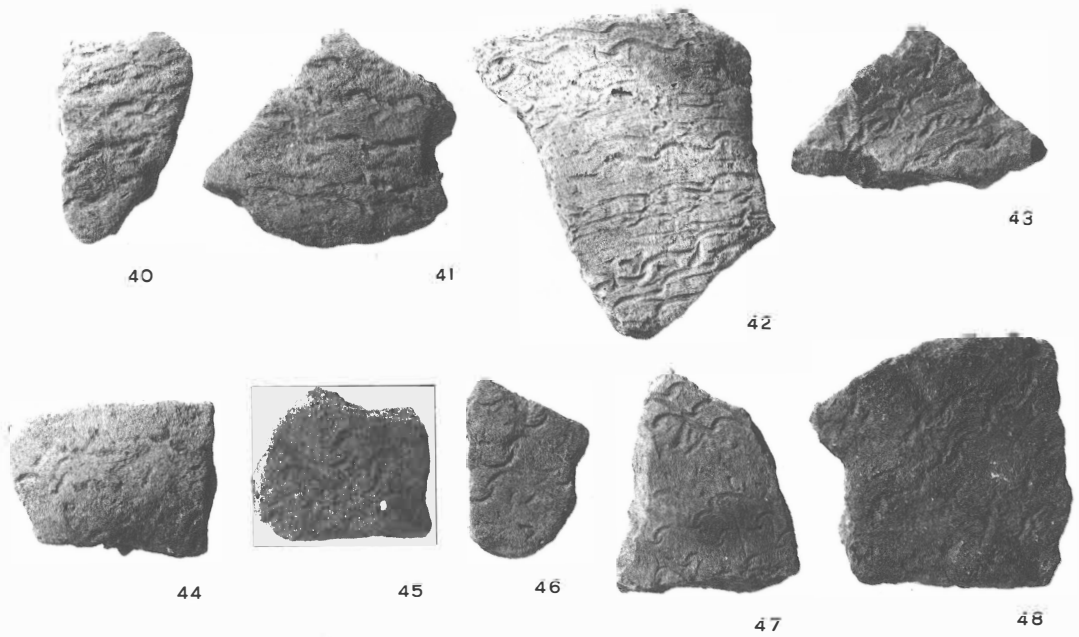


32

縄文土器(4)



縄文土器(5)



縄文土器(6)



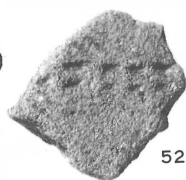
49



50



51



52



53



54



55



56

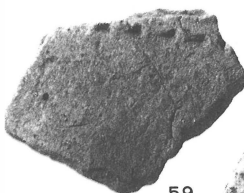
縄文土器(7)



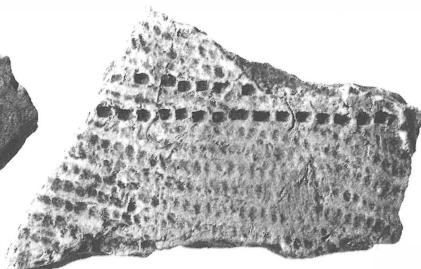
57



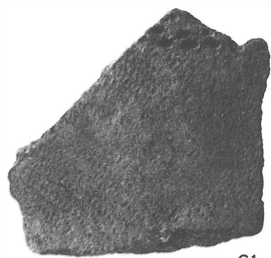
58



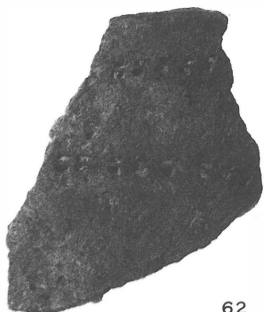
59



60



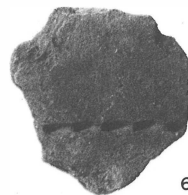
61



62

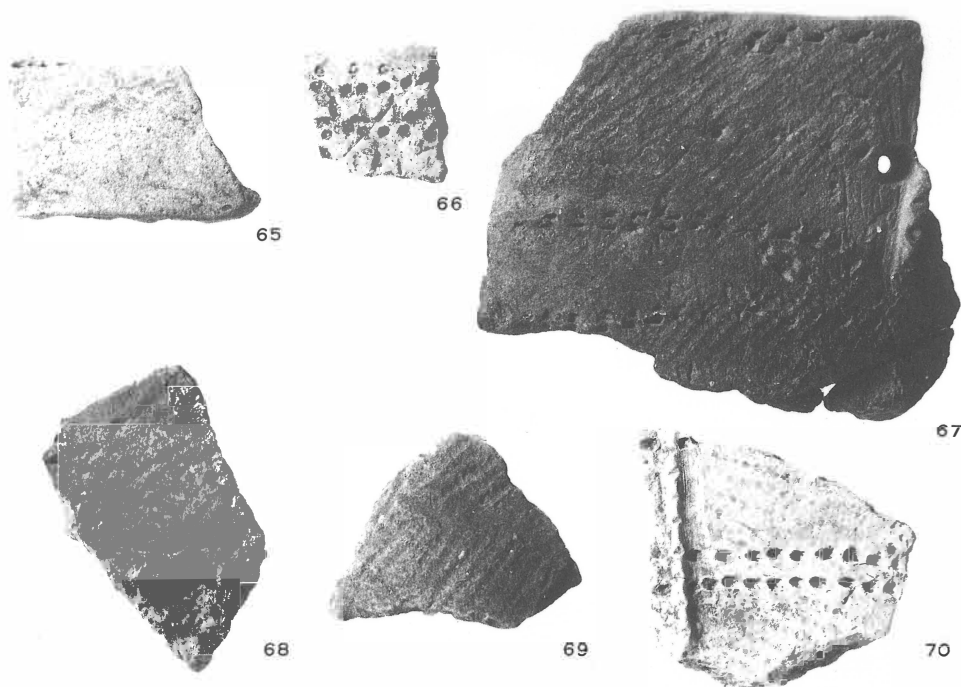


63

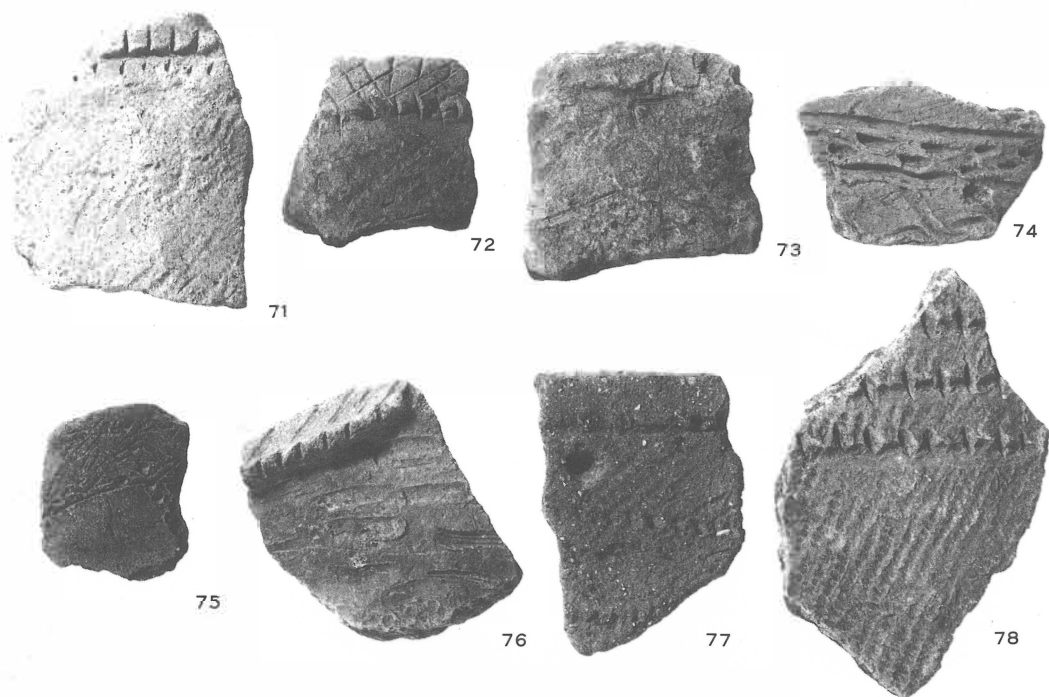


64

縄文土器(8)



縄文土器(9)



縄文土器(10)



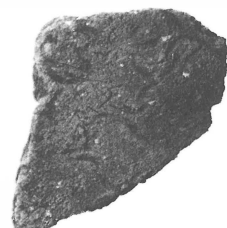
79



80



81



82



83



84



85



86

縄文土器(11)



87



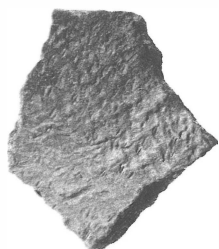
88



89



90



91

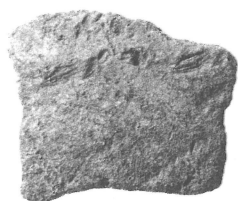


92

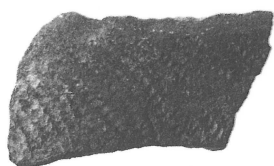


93

縄文土器(12)



94



95



98



96

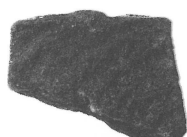


97

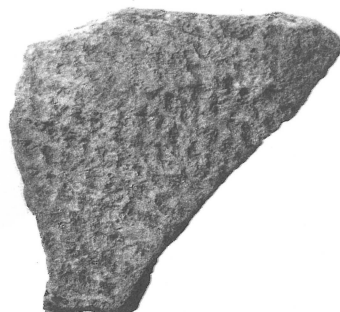
繩文土器(13)



99



100



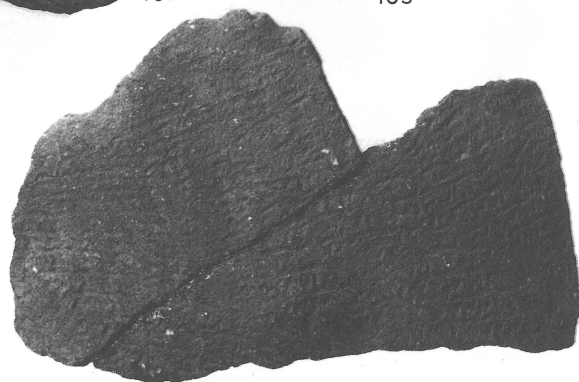
103



101

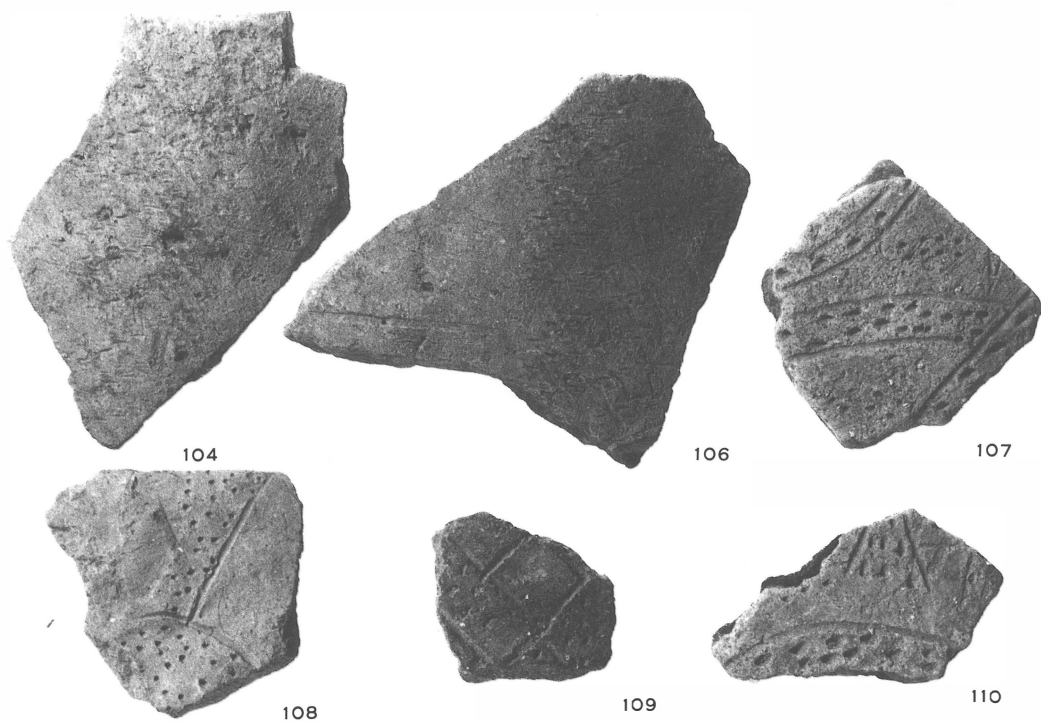


102

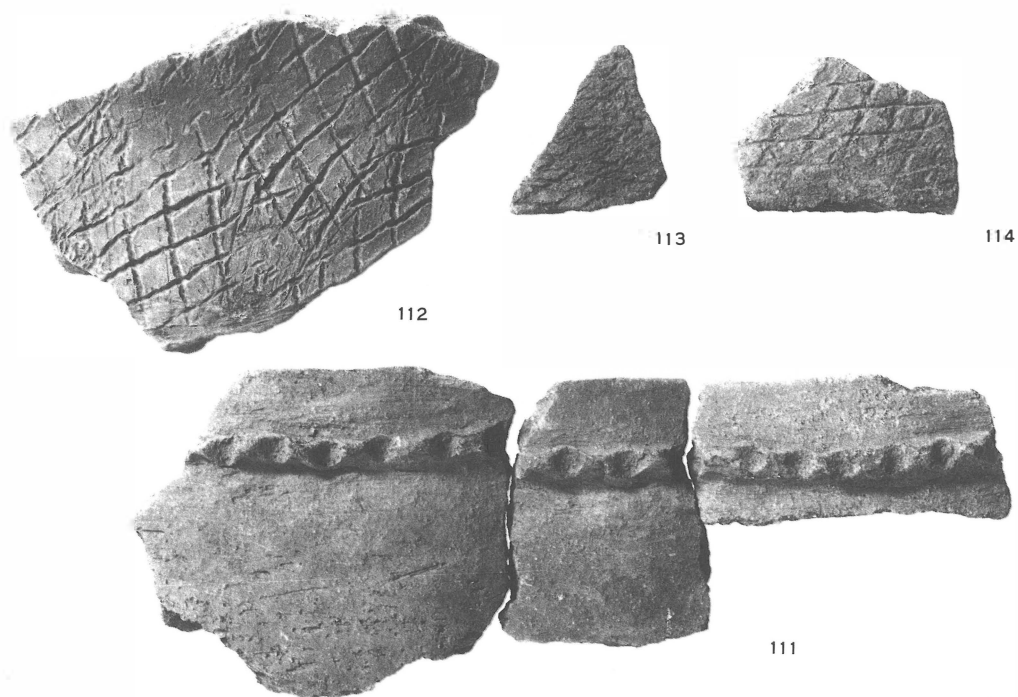


105

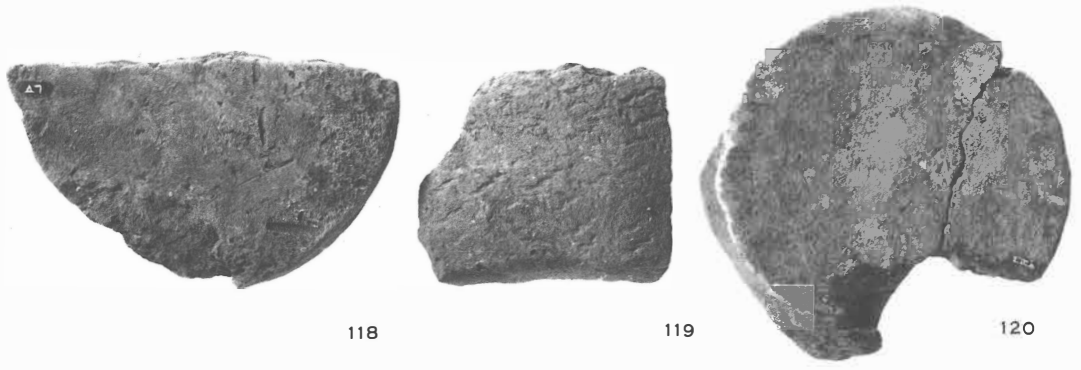
繩文土器(14)



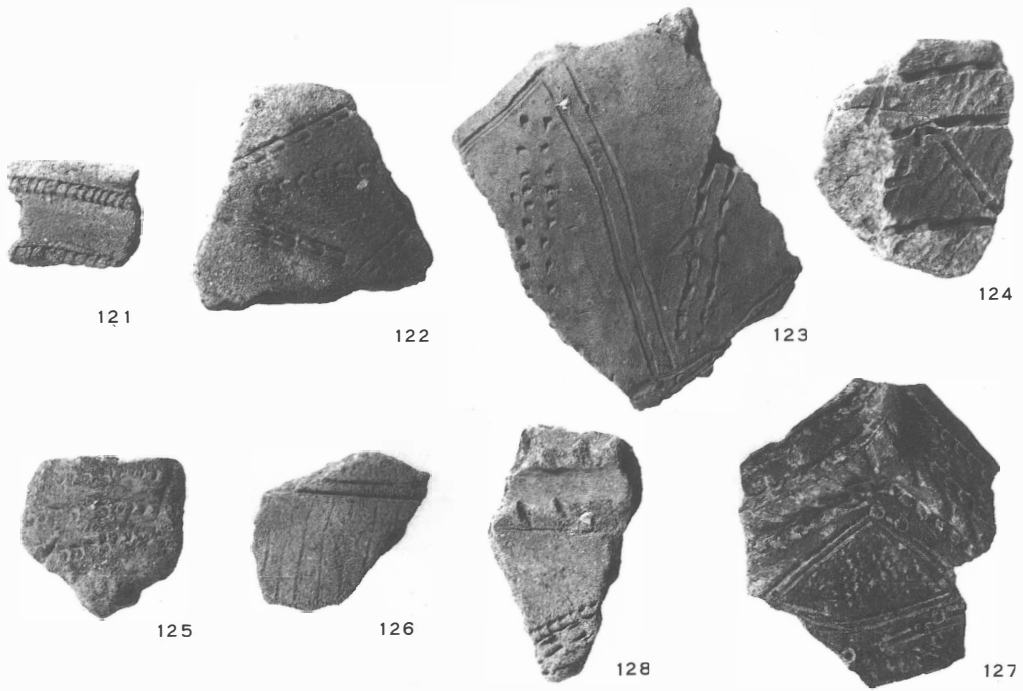
繩文土器(15)



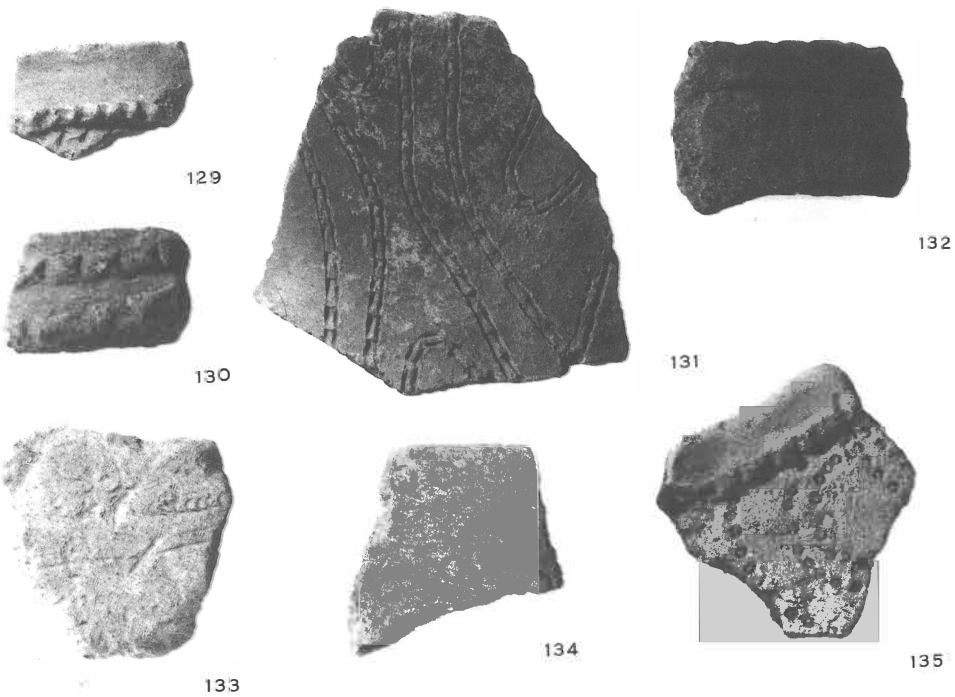
繩文土器(16)



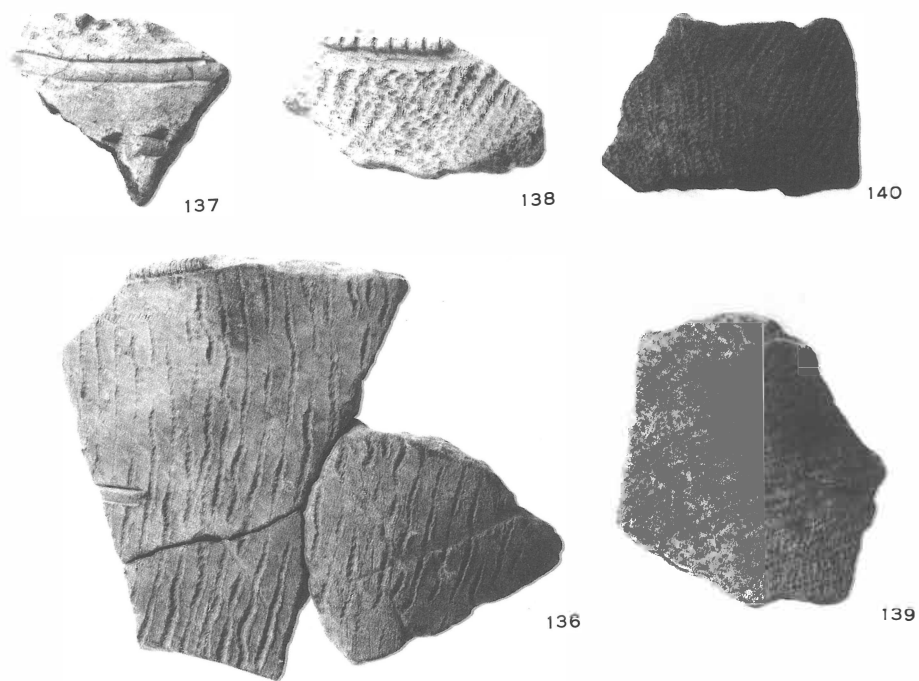
縄文土器(17)



縄文土器(18)



縄文土器(19)



縄文土器(20)



141



142



143



144



145



146



147

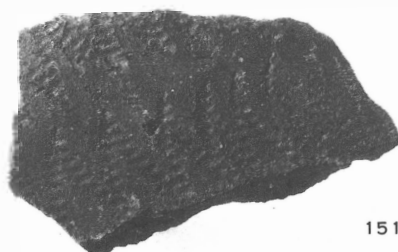


148

繩文土器(21)



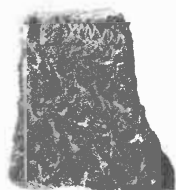
149



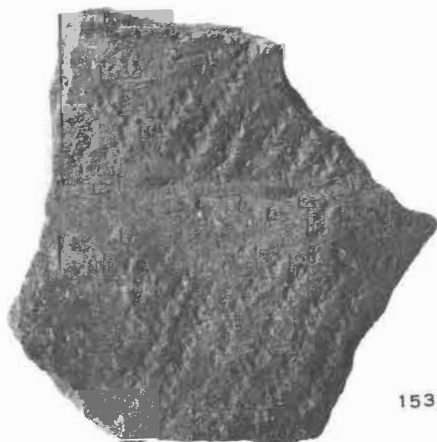
151



152

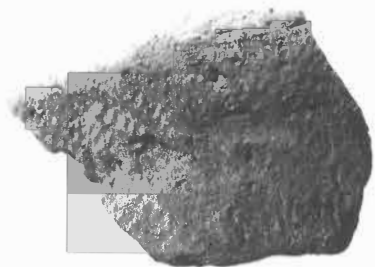


150



153

繩文土器(22)



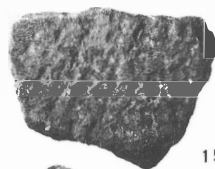
154



155



156



157



158



159

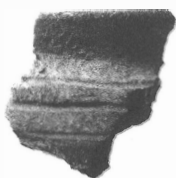


160

縄文土器(23)



161



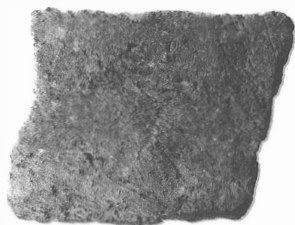
162



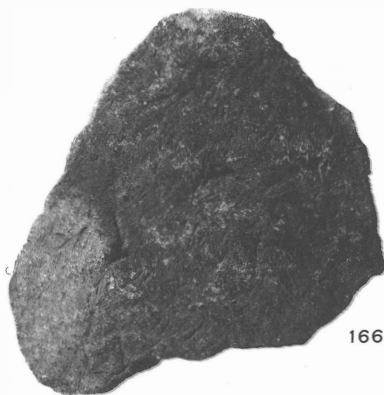
163



164



165



166



167

縄文土器(24)



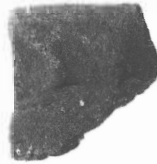
168



169



170



171

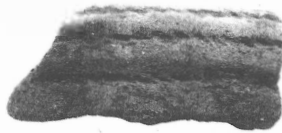
繩文土器(25)



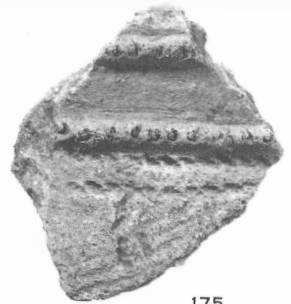
172



173



174



175



176



177



179



178

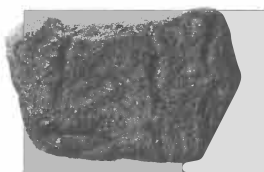


181

繩文土器(26)



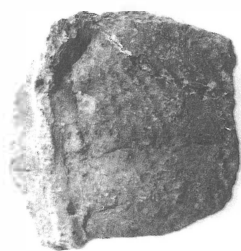
182



183



180

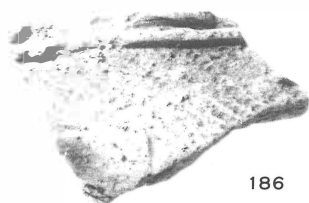


184



185

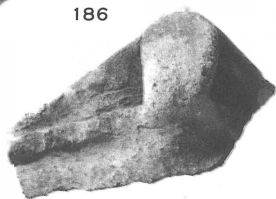
縄文土器(27)



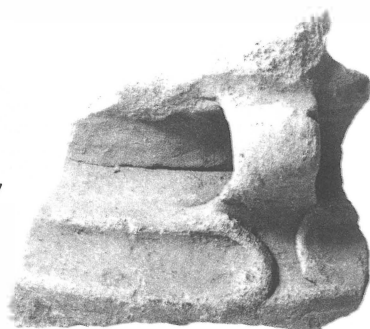
186



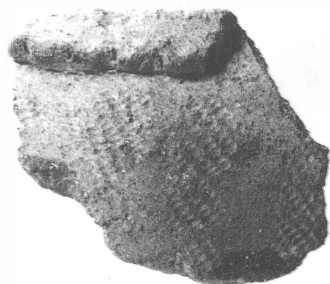
187



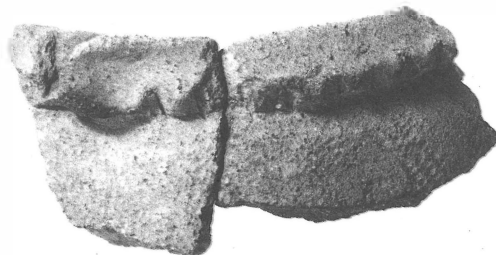
190



189



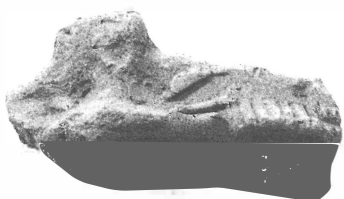
188



縄文土器(28)



193



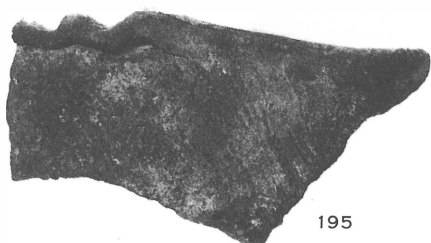
192



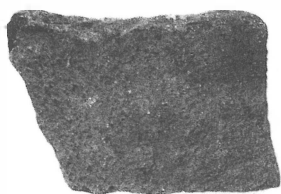
191



194



195



196

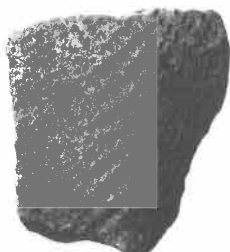


197

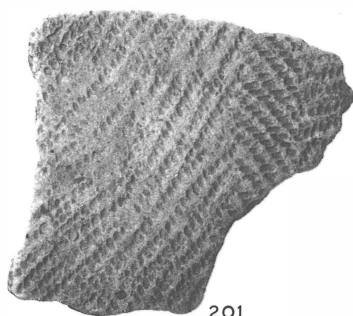
縄文土器(29)



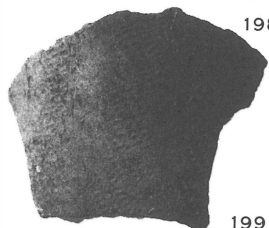
198



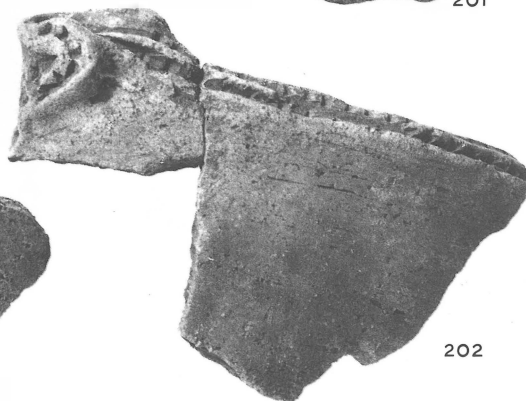
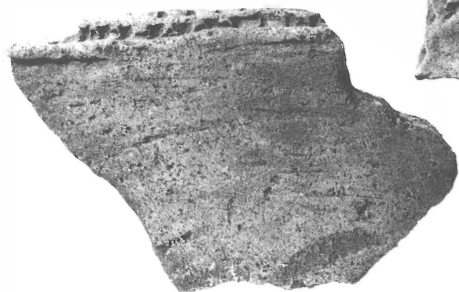
200



201

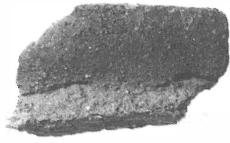


199

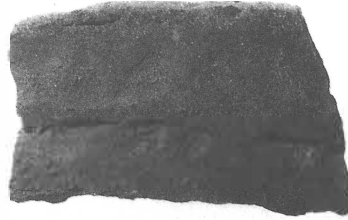


202

縄文土器(30)



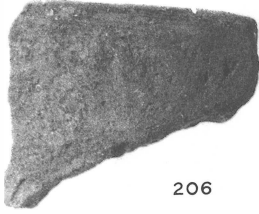
203



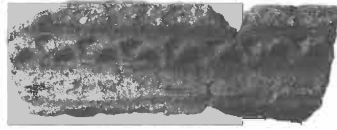
204



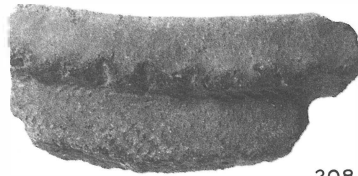
205



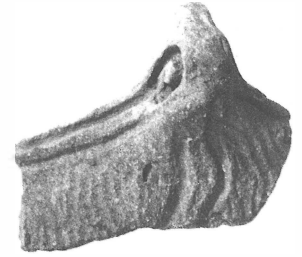
206



207



208

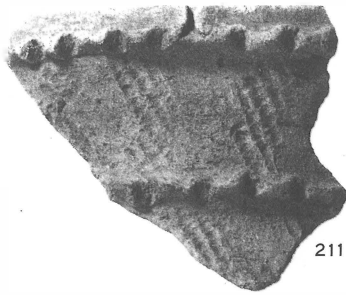


209

繩文土器(31)



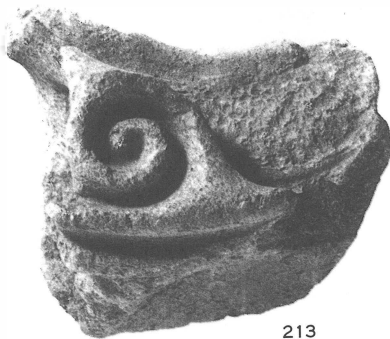
210



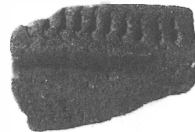
211



212



213



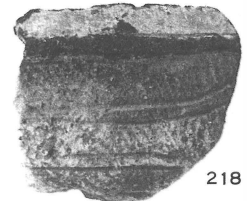
214



217

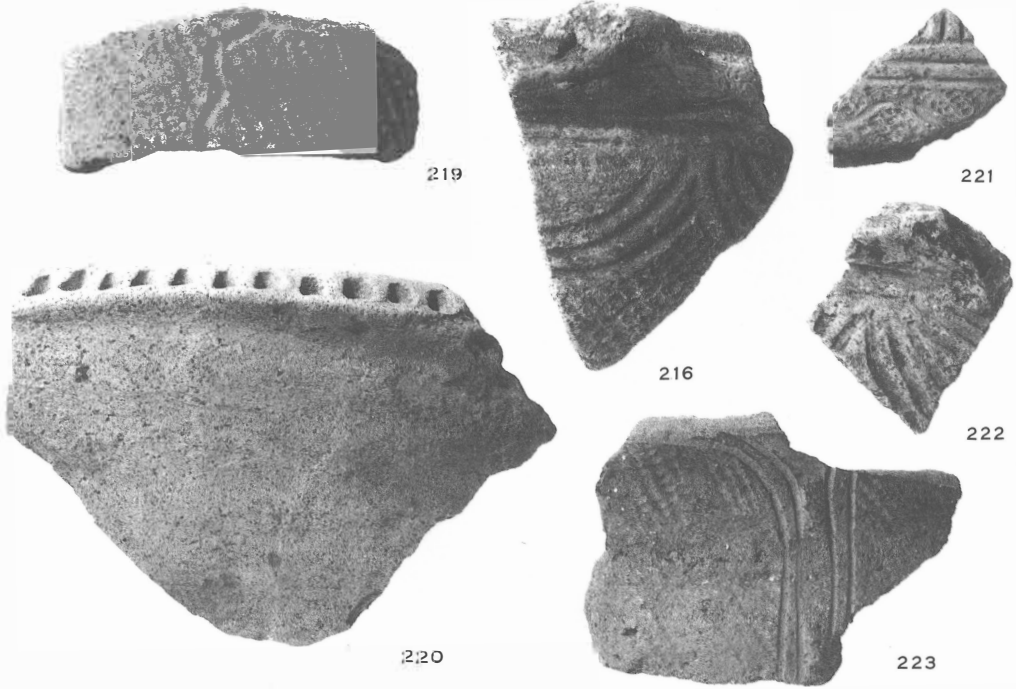


215

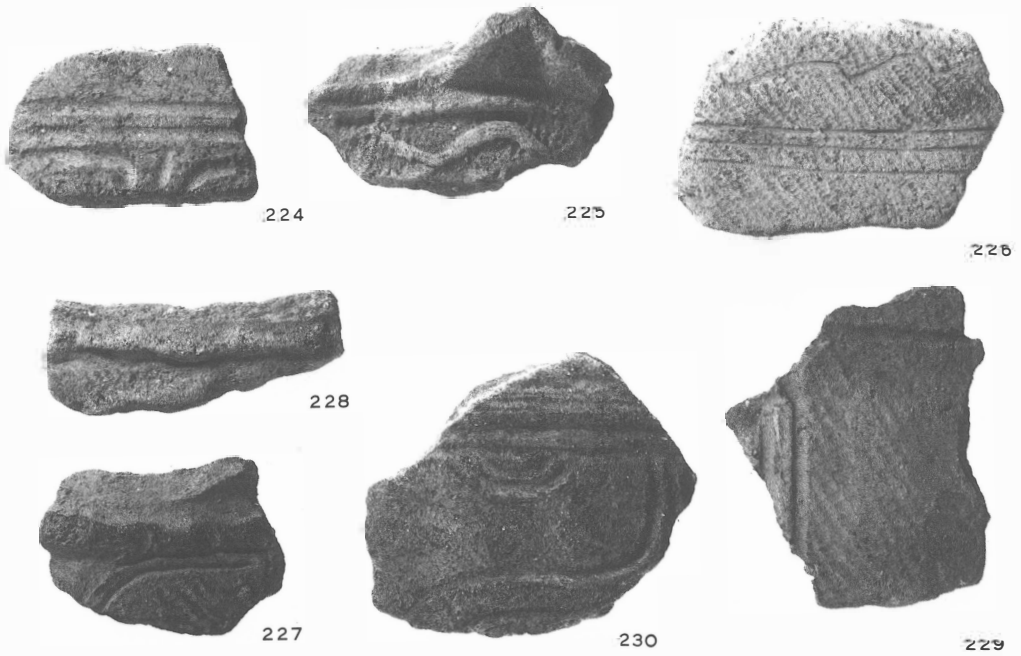


218

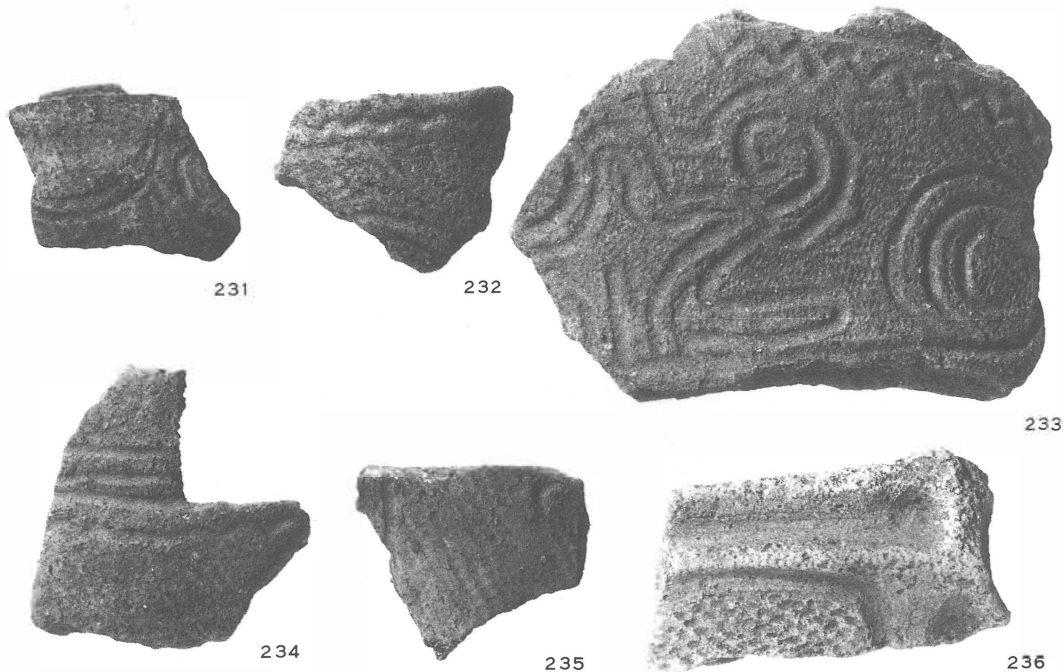
繩文土器(32)



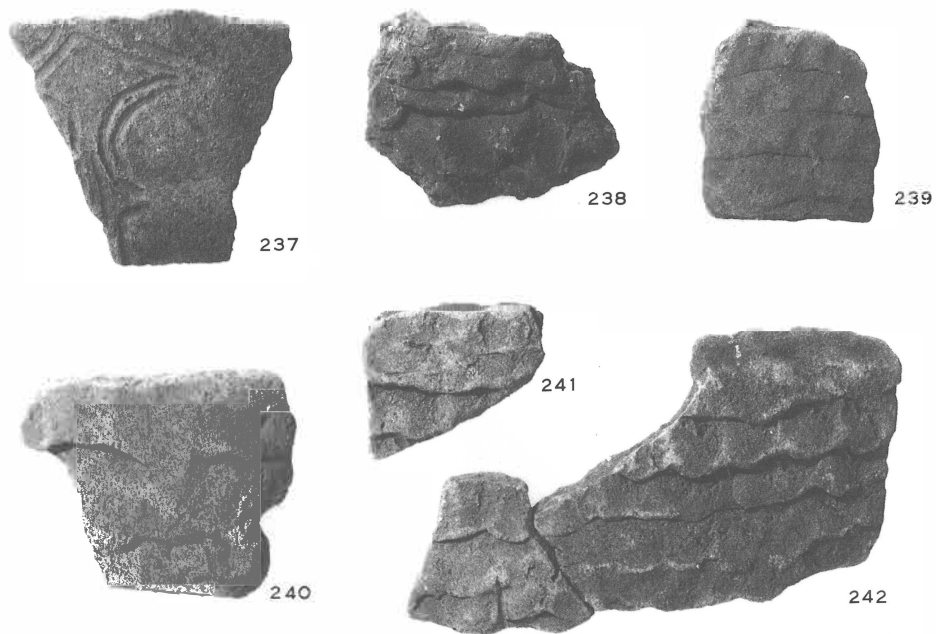
縄文土器(33)



縄文土器(34)



縄文土器(35)



縄文土器(36)



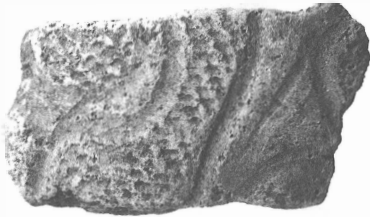
243



244



245



246

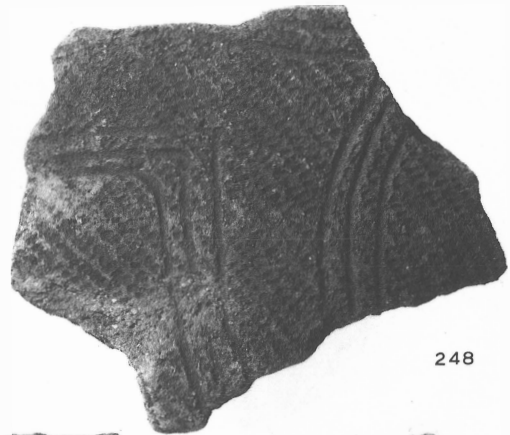


247

繩文土器(37)



249



248



250



251



252

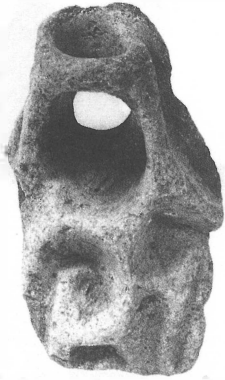
繩文土器(38)



253



254



255

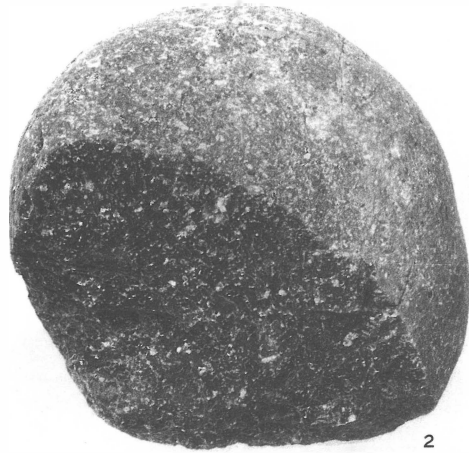


256

縄文土器(39)



1



2

昭和63年 3月31日 発行

角部内南台東貝塚

編集 玉川一郎・吉田秀享

発行 福島県相馬郡小高町教育委員会
(〒979-21) 福島県相馬郡小高町本町二丁目89番地

印刷 (有)平電子印刷所 美術写真印刷研究室
〒970 福島県いわき市平北白土字西ノ内13
